
白竜奇譚・私を団子屋へ連れてって！

真下守里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白竜奇譚・私を団子屋へ連れてって！

【Nコード】

N5247M

【作者名】

真下守里

【あらすじ】

「中つ国」の若き国王ユアン「カイ」ハシム5世は、身の丈に合わない国王の立場と執務にいささか嫌気がさしていた。そんなある日、彼が思いついた「息抜き」の方法とは……「竹馬の友」の竜に身代わりを頼んで城下へ出ることであった！？

「国王陛下」が国じゅうで一番偉いだなんて、絶対に嘘だ。

ここ「中つ国」にて目下その立場にあるユアン「カイ」ハシム五世・御年二十歳は、心中でそうばやきつつ、今日も職務にいそしんでいる。

まずは、日の出と共に叩き起こされ、ぼーっとしたまま沐浴。

毒見役を十名は軽く通したんじゃないか、と思われるほど冷え切った、品数だけはやたらと多い朝餉をほぼ十分程度で食したのちは、ひたすら会議及び各郡代からの陳情関連を筆頭とする決裁の数々――特に後者などは、署名しても署名しても一向に書類の束が減って行かない。

まるで当代きつての人気役者もかくやという雰囲気だが、残念なことに、彼らと自分の間には決定的な違いがある。どれほど手を痛くして署名をしたとしても、感激も感謝もされず、当たり前のような顔で書類を受け取って帰られてしまうのだ。

朝餉とどこが違うんだというていの昼餉をはさんで、午後にはたまに外に視察に出る機会などもあるが、これがまた窮屈なことこのうえなかった。

日程は当然国じゅうに告知済みであるから、沿道は人、人、人……その全員の「期待」を裏切らぬよう、延々と微笑みつつ手を振り続けねばならない。

国王とて人間だから、挙げっぱなしの手が疲れてみたり、時にはどうしようもなく催してみたりもするのだが、決してそのようなことは気取られてはならなかった。

そして、朝昼より若干イロがついたかな、という夕餉が終わったあとには、「最大の激務」が待っている。このほど北方の「上つ国」

より迎えた「許婚殿」のご機嫌伺いに行かねばならないのだ。

無論、両国の友好関係を維持するための政略結婚であり、なおかつ両国の力関係は運悪く若干「上つ国」の方が勝っていたから、国王としては最大限かつ細心の注意を払って彼女に接しなければならぬし、近臣たちも「いずれはお世継ぎを作らねばならないのですから、今のうちからできるだけ仲睦まじく」と陰に日向にかまびすしい。

……ではあるが。

くまのぬいぐるみを相手にままごと遊びに余念のない5歳児を相手に、いったい何をどう「睦まじく」しろと言っのдарう？

「あつはつはあ、ご愁傷さん！」

あれこれと状況設定を変えて合計五回も「お父様役」をやらされ、執務以上の疲労困憊ぶりで自室へ戻ってきたユアン・カイの真上から、揶揄たつぷりの声が降ってきた。

「いやぁ大いに楽しませてもらったわ！ ガキの遊びだつつのに既にしつかと尻に敷かれつつある、国王陛下のなっさけねえご尊顔！！！」

誰ぞに聞かれたら「陛下に対して何たる無礼！」と大騒ぎされた拳句に一刀両断に成敗されるところであろう。

が、幸か不幸かその心配はなかった。

厳密に言えばそれは「声」ではなく一種の「信号音」のようなもので、国王の頭の中にじかに送り込まれてきているのだ。

つまり、相手は「人ならぬもの」だったのである。

それは、まだユアンⅡカイが十歳になるやならずで、「国王」どころか、上に三人もの兄がいたがゆえに「王太子」ですらもなかった頃のこと。

当時「養子」という名の「人質」として暮らしていた「下^{しも}つ^{くに}国」の王宮の庭で、彼は風変わりな「拾い物」をした。

手のひらに乗るほど小さな、真っ白い竜であった。

頭にちょこんとくつついている金色の角は二本のうち一本が取れかけてぐらになつており、小さいながら一人前にゴツゴツしたウロコに覆われた細長い体は傷だらけ。背中に生えた小さな翼は、一對の片方が、まるで嵐の中でさしている雨傘のように、ぼつきりとあらぬ方向へ折れていた。

どうやら、空を飛んでいて誤つて落ちたものらしい。

ユアンⅡカイは、そのチビ竜を懐に入れて自室へ連れ帰り、こつそり傷の手当てをしてやった。

物の本によれば、竜は危険な生き物だ、とか、災いを運んでくる、とかいう話だつたけれど、自分の手のひらの上で真っ赤な両眼をうるうるさせながら震えまくっていたそいつは、間違つても「危険物」などには見えなかった。それに何より、孤立無援な人質生活の中で、いつしかぼつかりと心に開いていた穴を埋めてくれる存在がほしかったのである。

それから、およそ十年――

体の傷を治してもらった竜と、心の傷を癒してもらったユアンⅡカイの絆は、竜の体が手のひら大から、やはり背が伸びて六尺（約一八〇センチ）相当の威丈夫となったユアンⅡカイと同程度の大きさにまで成長し、種々の巡り合わせによってユアンⅡカイが思いが

けず玉座についてしまった今も、変わることなく結ばれていた。

もちろん、国王が「災いの元」を飼っているなどとまわりに知れたら大問題だから、竜は、普段はもっぱら「保護色」を使ってその姿を人目から消している。そして、ユアンⅡカイと二人（？）きりになると、初めてゆるゆると姿を現し、今のように話し（？）かけたり、時にはずりずりとその膝に乗ってきたりするのであった。

ユアンⅡカイは、仏頂面で竜を睨んだ。竜は、別に動じなかった。常に「穏やかで心優しく気高い国王陛下」の仮面をかぶらなければならぬユアンⅡカイが、こんな顔をできるのは自分の前でだけなのだと自負していたからだ。

しかし、そんな竜も、次に国王の口から飛び出してきた言葉にはさすがに啞然とした。

「私の代わりにここで座っている。私は、城下へ団子を食いに行ってくるから」

「カイ！ なあカイってば！」

どうしたものかと思案した末、竜は相手の右腕にくるくるとからみついた。

「おまえ、自分が何言ってるのかわかってんのかよ？」

「だから団子を食いに行くと言っている！」

竜を払いのけようとしながら、ユアン「カイは頑固に繰り返した。

「度重なる執務上の重圧で、どうしようもなく脳が糖分を欲しているのだ。滅多に頭を使わん貴様には、恐らく一生かかってわからんだろうがな！」

「だあれが頭を使わないって？」

竜の真つ赤な目が、たちまち三角になった。

「使ってねえのはてめえだろう。その立場で城下なんぞに出て、何かあったらどうする気だ！」

「そのときは、貴様がそのまま私の代わりを務めればいいだけの話だろう！」

負けじと国王も眉を吊り上げる。

「実際、今までだって、それで全く問題なかったではないか。

一年前、酒を全く受け付けん私に代わって『上つ国』との酒席兼外交交渉に出席し、顔色ひとつ変えずに出された酒をすべて飲み干

したうえ、逆に先方に飲ませまくって、我が国に極めて都合の良い方向に話をまとめ上げてしまったのはどこの誰だ？ 半年前、私が流行り病で寝込んでいたとき、代わりに『下つ国』との小競り合いに出張り、あっさりとその場を納めてしまったのは……？

政治や戦向きまじいのときは良くて、団子を食いに行くときは悪いというのはどういうわけだ。我汝に問う、その判断の基準いずこにありや？」

「そつ、それは……」

返答に窮した瞬間、からんだ体がわずかに緩む。その虚を突いて竜の拘束から逃れると、国王はさっさと衣裳戸棚を開け、いつの間に用意したのか「下々の者」の衣服を引っ張り出して、さかさかと身につけ始めた。

「とにかく私は、城下の屋台売りの、餡子がふんだんに乗った温かい団子がたまらなく食いたいのだ」

「だったら、俺が『ひとつ飛び』して買って——」

「それでは意味がない！」

ぴしりと国王は遮った。

「だから、貴様は頭を使っていないと言っている！ 私は、『ここにいたくない』のだ。この城内にいるだけで息が詰まる！ 気が狂ってしまいそうだ……！」

「はああ……」

国王が脱ぎ捨てた群青色に銀糸の刺繍の入った王族服を口にくわ

えてずるすると几帳の裏側に引きずって行くと、竜は大きなため息をついた。

「俺、ちよつとカイを甘やかしすぎちまったかなあ……」

絵草子などに載っている想像画に比べると随分とちんまりしているせいで、ユアン「カイは竜のことを完全に「格下」扱いしているようだったが、竜自身は、大怪我のために混濁していた意識が回復して最初にユアン「カイを見たとき、本能的に「こいつ、絶対俺よりチビだ」と思った。

なので、それからもずっと、いわば「兄貴のような目」でユアン「カイと彼の成長ぶりを見守ってきた。

変化能力で彼に姿を変えて、「上つ国」との折衝や「下つ国」との戦に出る気になったのも、要はその一環だった。早い話が、見ていられなかったのだ。何しろ、ユアン「カイときたら、前者のときは、部屋に漂っている酒の匂いを嗅いだけで厠（かわや「トイレ」）の住人となってしまうし、後者のときは、高熱でふらふらになっているというのに無理して甲冑を着ようとして、拳句に甲冑の臭いにむせ返って、やっぱり厠の住人になってしまうような有様だったのだから。

しかし、まさかその変化の力を、「息抜きに団子を食べに行く」などという口くでもない目的のために利用されてしまうことになるうとは。

「いっそのこと、右左どつちかの大臣にチクリに行つちまおうかな……」

たやすいことである。姿を消して彼らに近づき、風のひとつも起こしてこの部屋にやって来るよう仕向ければ良いのだが、

『温かい団子が食いたいのだ』

『息が詰まる!』

『気が狂ってしまいそうだ……!』

そう訴えたユアン・カイの、そこはかとなく苦しげな表情が脳裏に甦った。

「……ちっ」

舌打ちすると、竜は目を閉じ、意識を一点に集中させた。

ややあつてのち、几帳の陰から出てきたのは、どこから見ても国王としか思えない、軽くクセのかかった短い黒髪と、浅黒く彫りの深い顔立ちを持った、すらりと背の高い青年だった。

ただひとつ、黒い瞳の奥の奥に、熾き火のような赤い光が灯されていることを除いては。

その実は竜が化けていた国王が、「下つ国」との国境紛争を解決したこと（再燃する危険性はゼロとは言えないものの）と、王と「上つ国」の一の姫との婚約が整ったことで、とりあえず今のところは、「中つ国」の立場は安定していると言えた。

それを反映してか、城下の様子はなかなか賑々しいものであった。既に宵の口に入って数刻は経とうというのに、街一番の目抜き通りには多くの大店の明かりが漏れ、道には所狭しと人々が行き交っている。

時折、金持ちの旦那衆を乗せた馬車や牛車（この近在の国々では一般庶民の移動手段はもっぱら徒歩であり、車や馬を使えるのはごく一握りの階層に限られていた）が通りかかることがあるのだが、ともすると、それらが立ち往生してしまうほどだ。

さて、そんな目抜き通りから一步入った路地裏に、ひとりの初老の団子屋が屋台を構えていた。かつては目抜き通りの老舗で修行をしており、一時は暖簾分けの話さえ出たこともある腕前だったのだが、その味をもつと廉価でたくさんの人に提供したいという意見が店の主人に聞き入れられず、店を出されて、しがない屋台売りへと転じたのである。

そして、彼は今、主人と言い争った若き日と同じくらい困惑した顔をしていた。

「なあ、兄ちゃん。そーんな顔してじいっと団子見てたって駄目だよ。ちゃあんと小銭を持ってこねえと」

「兄ちゃん」と呼ばれた背の高い青年は、腕組みをしてうーんと唸った。その視線は、ずらりと並んだ餡団子をまるで仇のように睨

みつけたまま動かない。

「どうしても金貨では売ってくれぬのか。両替の手間があるというなら、釣りは出してもらわずとも構わないのだが」

「そういうわけには行かねえよ」

団子屋は、眉をひそめて反駁した。

「それじゃ、俺は俺を追い出した店の奴らと同類になっちまう。それになあ兄ちゃん。あんたがどれほどの金持ちなのかは知らねえが、銭つてのは玩具じゃねえんだ。」

世の中には、その金貨一枚稼ぐのに一年も二年も汗水たらして働かなきゃならねえ人間がゴマンといえるんだぞ。そいつらが、今のあなたの振る舞いを見たら、どんなふうと思うと思うね？」

返す言葉を失って、青年はうつむいた。とたん、腹の虫が四方に響き渡るほどの勢いで、きゅるる……と悲鳴を上げる。たちまち真っ赤になって、ますます青年は下を向いた。

「何だい、そんなに腹が減ってるのか」

呆れたように団子屋が言った。

「だったら、その金貨持って、もっといい店に行きな。それだけあれば、こんな団子よりうまいもんがいくらでも食えるだろう」

「私は、『この団子が』食いたいのだ！」

青年は、しかし頑迷にかぶりを振った。

「以前、表の目抜き通りを通った折に、ふっとこの団子の匂いがし

たのだ。通りにはそれらしい店はなかったから、恐らく今日のよう
にこうして裏通りで商いをしていたのだろうが、それにもかかわら
ず、香ばしい匂いがはつきりと……

どれほどうまい団子なのかと、それ以来ずっと思っていた。そし
て、一度は食ってみたいと願っていたのだが、仔細があつてなかな
か家を空けられなくてな。今夜になって、ようやく留守居を頼んで
出てくることができた。そして、匂いを頼りにあちこち歩き回って
やっとの思いでここを探し当てたのだ。それなのに……」

声が詰まり、ぎゅつと唇が噛みしめられる。やれやれ今度は泣き
落としか、と団子屋がさらに呆れ返ったそのとき、青年の背後から
声がした。

「兄ちゃん。そんなにその団子、食いたいのかい」

年の頃十二、三ぐらいの子どもだった。ところどころ穴の開いた
粗末な衣服に身を包み、髪はぼさぼさ。顔も土埃で薄汚れてはいた
が、その丸くて大きな両眼には、そんなことなど物ともしない澀刺
とした光が宿っている。

「何なら、オレが手に入れてやるっか」

「クウ！ てめえ、何トチ狂ったこと言つてやがる！」

青年が口を開く前に、団子屋が目を剥いた。

「てめえの持つてる銭なんざ——」

「どんな銭だろうと、銭は銭だ」

ふんと鼻を鳴らして、クウは言い放った。

「それこそ、汗水たらしで手に入れた錢だぜ。誰に文句を言われる筋合いがあるよ？」

「っつーかよ、おやつさんもおやつさんじゃねえの？ いつつも『俺は、金に困ってる奴らにこそこの団子を食ってもらいてえんだ』みたいなこと抜かしといて……」

「そりゃあ、この兄ちゃんは、金貨しか持ってねえような大金持ちだろうよ？ でも、『団子を買う金』には困りまくってんじゃねえか。」

「だったら、ポーンと一本ぐらい恵んでやるってのが、本物の『漢』おとこって奴なんじゃないのかねえ。」

「それとも何かい、そんなことひとつできねえほど、おやつさんはケチでしみつたれなのかい？ あーあ、嘆かわしいねえ……」

「……何をぉ！」

団子屋の顔が茹でダコのようになった。

「ひとを馬鹿にするのもいい加減にしろよ——わかったよ。恵んでやりゃあいいいんだろ？ 恵んでやりゃあ！」

「……なあ」

クウのあとに追いつきながら、青年——ユアン＝カイが、おずおずと話しかけた。

「本当に良かったのか。その、金子きんすも払わずに……」
「いっていいって」

鷹揚にクウは手を振った。

「あのおやじ、あれで案外稼いでやがるんだからさ。そんな餡団子の一串ぐらいどうってことねえよ。
そんなことより、食わねえのか？ それ。食わねえんだったらオレが」

「それは困る！」

慌てて遮ると、ユアン＝カイは、ぱくりと串にかぶりついた。

「……熱っ！」

日頃「お毒見後」の冷え切った食べ物ばかりになじんできた舌が、焼きたての団子に触れて縮み上がる。

だが、それもほんの一瞬のことだった。やがて、その舌の上でこのうえない甘さがとろけ、それと同時に、表情の方もうつとりととろけた。

「ああ……」

そう呟いたきり、次の言葉が出ない。そんな彼を見て、クウが吹き出した。

「面白えなあ、兄ちゃん。たかだか団子一串で——」

その顔つきが、不意に剣呑になった。

「どうした——」

怪訝に尋ねかけて、ユアン「カイも、一転、眉をひそめた。

「……よーお、ちょうどいいところで会ったな、クウ」

そう言いながら二人の前に立ちはだかったのは、衣服をだらしく着流し姿にした、頬に大きな傷跡のある三十男だった。その後ろには、やはり一癖も二癖もありそうな男どもが、五、六人ほど控えている。

「何だ、こやつらは」

クウの右腕を肘でつついて、ユアン「カイが囁いた。ポリポリ、とクウは埃まみれの頬を掻いた。

「ま……オレの『因縁の相手』、かな」

そして、いきなりユアン「カイの腕を引いた。

「逃げるぞ！」

「何……？」

ユアン「カイは面食らったが、否やを言っている場合ではなかった。男たちが、一斉に襲いかかってきたのである。

「こつちだ兄ちゃん！」

先に駆け出したクウが、角を曲がったところで手招きした。その目が、呆れたように見開かれる。

「この期に及んで、何団子なんか食ってんだよ！」

「はっへほっはひはひ（だってもったいない）……」

言いながら串を右に引いて団子をすべて口の中に収めると、ユアン「カイは、先頭の男めがけて、ひゅう、と串を投じた。

「うぎゃっ！」

眉間を押さえて男はひっくり返った。あとから来た連中のうち二人が、彼とぶつかって一気に将棋倒しになる。クウが歓声を上げた。

「すげえ！」

「はひ、はひひはほほは（何、たいしたことは）——」

答えかけた拍子に団子が喉に詰まり、ユアン「カイは目を白黒させた。

「バツカ……」

頭を抱えると、クウは腰に吊るした竹の水筒を投げてよこした。すまん、と仕草だけで謝って、ユアン「カイは水筒を受け取った。

走りながらゴクゴクと水を飲み、団子を喉の奥に流し込んで、ようやく呼吸が可能になる。水筒を相手に投げ返し、行け、と短く促すと、彼は後ろを振り返った。

残りの三人が、まだしつこく追ってきている。立ち止まって身構えると、ユアン「カイは低く唸った。

「貴様ら……」

右の拳が空を切り、先頭の男の頬に炸裂する。

「貴様らのせいで……」

右膝が上がって二人目の男のみぞおちに深々と食い込み、同じ足のつま先が、三人目の男の顎をきれいな弧を描いて蹴り上げた。

「せっかくの団子を、二つも味わえなかったではないか……っっ！」

ゴロゴロと、遠くの方で雷鳴が聞こえた。

「こりゃ一雨来るかな」

空を見上げて、クウが顔をしかめた。

「そうだ兄ちゃん、ウチに寄っていかないかい？ さっきのお礼に茶の一杯もご馳走したいしさ。」

「しかし強えなあ兄ちゃん。実は軍のお偉いさんか何かだったりして？」

「……いや」

「当たらずとも遠からずだが、とユアン＝カイは心でひとりごちた。国王は、国軍の総司令官も兼ねていたからだ。」

しかし、ここでそれを言っても相手が混乱するだけだろう。だから、黙って自分も空を見上げた。暗い宵闇の中でも、むくむくと黒い雲が沸き起こっているのがわかる。その間から、時折稲光らしきものが見え隠れしていた。

やがて、二人は街外れに出た。家屋がまばらになり、代わりに荒れた野っ原の割合が増えてくる。

「このあたりも、ちょっと前までは結構な畑だったんだ」

問わず語りにクウが呟いた。

「だけど、五年前の戦^{いくさ}で男手がみんな取られちゃって、それから

耕す人間も……ウチの父ちゃんも、その戦で死んじまったしさ」
「そう、か……」

ユアン「カイは目を伏せた。

五年前の戦——「上つ国」との間に起こったそれは、半年前の「下つ国」とのそれとは比べ物にならないほど大規模なものだった。クウの父親のような民兵はもちろんのこと、正規軍の方もかなりの痛手を被った——何しろ、指揮を執っていた第二王子と第三王子までもが立て続けに命を落としたのだから。そして、それをきっかけに、本当なら人質として暮らしていた「下つ国」の、どこぞの貴族の嬪殿あたりにおさまって一生を終わるはずだったユアン「カイ自身の運命も、大きく転換して行くことになったのだ……」

ピカッ、とひとときわ激しく稲妻が走った。と同時に、ドドン、と大きな雷鳴が響く。クウの口からひつと小さく悲鳴が上がり、その体がふらりとよろけた。とっさにユアン「カイは相手を抱き止め……瞠目した。

ポツポツと雨が落ちてきた。

はっと身じろぎして、クウがユアン「カイから離れた。小走りに、近くの藁葺きのあばら家へ入って行く。ユアン「カイは、黙ってそのあとに続いた。少しだけ迷ったのだが、見たところほかに雨露をしのげそうな場所もなかったのだ。

間もなく、雨は本降りになった。

「何で何も聞かないんだよ」

客に卓につくよう勧め、火を熾して湯を沸かし始めたところで、クウが怒ったように口火を切った。
ゴツゴツした木の椅子に座ると、ユアン「カイは窓の外に目をやった。

「何というか……そうやって隠していたぐらいだから、聞いてはいけないのか、と」
「なるほどね」

小さくクウは肩をすくめた。

雨に濡れた衣服は、乾いているときと比べてぴったりと体にまとわりついていた。その分、体の線もくつきりと浮き出ている——それは、十二丁三の、ましてや少年のものではなかった。

「あんた、やっぱり変わってる。

普通の男だったら、オレ——あたしが女だってわかったとたんに、もっと別の反応するのにさ。あれこれしつこく詮索したり、とか、

あとは……ありていに言や、押し倒しにかかる、とか。

まあ、だからこそ男の格好して出歩いてるんだけどね。そうしときゃ、少なくとも襲われたり女郎屋に売り飛ばされたりする危険だけはなくなるだろ？」

ユアン「カイは、相手に視線を戻した。

「すると、さっきの連中は――」

「ああ違う違う」

クウは、しかしあっさりと首を振った。

「あれはね、あたしをしょっ引きに来た連中。あたし、人様の財布いただいて暮らし立ててるもんでさ。

……ちよつとあんた？ どうしたの、顔色良くないよ……？」

「いや、若干頭痛が、な……」

こめかみに指を当てて、ユアン「カイはため息をついた。

国王は、警察機関の長でもある。その自分が、よりによって私服の警察部隊を叩きのめしてしまったとは……

シュウシュウと音を立てて湯が沸いた。クウは急須に入れた茶葉にそれを注ぎ、二人分の茶を淹れた。

ユアン「カイがすぐにその茶に手を出さなかったのは、例によって舌が熱さ慣れしていなかったからだだったが、クウの方では、それを別の意味に受け取ったようだった。

「やっぱ、盗つ人の淹れた茶は飲めない？」

でもさ、あたしみたいなヤツは、そうしなきゃ生きて行けないんだよ。

じゃあその辺の土地耕して、また畑にしたらいいって思うだろ？
だけど、そういうわけにも行かないんだよね。土地はぜーんぶ地主さんのもんで、そのお許しがないとあたしらは鍬一つ入れられないんだ。

ところが地主さんは、どうやらこのあたり一帯を金儲けの手段に使うつもりらしくてね——そのためには、下手に畑なんか作られちゃまずいんだってさ。

で、『こうして住まわせてもらってるだけでもありがたく思え』なんて逆に開き直られちゃって……」

ずずず、と自分の茶をすすり、窓の向こうに目を移す。その先には、王宮のある小高い丘が見えていた。

「せめて、王様がもうちょっとしっかり目を光らせてくれてたらねえ……」

街の人たちも、みーんな言ってるよ。前の王様と王太子様が流行り病で亡くなって今の王様に代わってから、勝手なことする奴らがどんどん増え続けてるって。まあねえ、噂じゃ、あたしなんかとた

いして変わらない若造みたいだから、みんなナメてかかってるんだろうけどさあ」

黙ったまま、ユアンⅡカいは湯呑みを手に取った。一口すすって、また「熱っ」と小さく呟く。

だが、彼はそのまま一気にそれを飲み干した。ちりちりとした熱さが、喉から胃の腑へ下りて行く。それと重なるように、ズキズキと胸の奥がうずいた。

（もうちょつとしっかり、か……）

それでも、自分では十分「一杯一杯」なのに……一杯一杯すぎて、つい団子を食いに逃げ出したくなるほどに。

しかし、それは取りも直さず、自分が所詮はその程度の器量なのだということを示しているのかもしれない。

王家の出とはいえ、ユアンⅡカいが継いだ「高貴な血」は父親のものだけで、母は王妃ではなく名もなき庶民だったのだという。

人質にやられた「下つ国」での通り名は、「中（つ国）の四の若君」。本名ではなく、出身地と出生順の番号という、いわば「記号」でしか呼ばれたことのない、「使い捨ての手駒」――

帝王学も満足に修めず、王太子としての経験も積みぬまま、ただ運命に流されるままに今の地位に就いてしまつて……そんな人間が一国を治めるなど、どだい無理な話だったのだ。

だいたい、あの竜にさえ、自分は明らかに負けまくっている。折衝にしろ、戦にしろ、もし自分が体調を崩してなどおらず、同じ場に臨んでいたとしたら、果たしてあんなに鮮やかに片がついていただろうか……

湯呑みを置くと、ユアンⅡカいは椅子から腰を浮かせた。

「そろそろ帰らなければ……いろいろと面倒をかけたな。感謝している」

「ちよつと待つてよ」

驚いたように、クウが大きな双眸を瞠った。

「まだ、雨相当降ってるよ？　せめてもう少し小降りになってからにしたら」

「いや」

遮って、ユアン＝カイは立ち上がった。

「あまり遅くなつては、留守居の者にも迷惑がかかる。

そうだ、もしあの団子屋に会う機会があつたら、金はいずれ使いの者にでも持たせるからと伝えておいてはくれまいか。

それから、団子はともうまかつたと……生まれ初めてあのようなうまいものを食つたと、そのことも……」

喉元に何かがせり上がってきて、思わず言葉が途切れる。それを相手に気取られまいと、ユアン＝カイは精一杯微笑んでみせた。そして、相手の顔も見ずに、さつさと外へ出た。

滝のような雨が一気に頭から降り注ぎ、あつという間に全身が濡れ鼠になる。

けれど、そんなことはどうでも良かった。むしろ、助かったとさえ思った——これだけ顔がびしょ濡れになっていれば、両眼から堰を切ったようにあふれ出てきたものも、きつとごまかせるのに違いない。

ふらふらと歩いて行くうちに、一本の大きな木が目に入った。吸

い寄せられるようにそれに近づくと、ユアン＝カイはその幹にもたれかけた。

プツン、と糸が切れたかの如く体から一気に力が抜け、ずるずると根元に座り込む。

（このまま……）

この雨に溶けて、消えてなくなってしまうたら——そんな思いがふと去来した。

自分などいなくなっても、あの王宮には「あいつ」がいる。自分などよりはるかに有能で、人臣の希望にかなう政治もできるであろう、あの白竜が。

いつそのままあいつに後を任せた方が、もしかしたら……

飾り棚に置かれた時計が、日付が変わったことを知らせた。時間的に「国王としての仕事」も特になく、その自室で（無論、国王の姿のままで）ごろ寝などしてくつろいでいた竜は、不意に身震いして起き上がった。胸の奥が、妙にざわざわと騒いでいた。

そういえば、団子を食べに行っただけにしては、えらく国王の歸りが遅い。

（もしかして、何か事故にでも遭った、とか……？）

嫌な予感が心をかすめた、その瞬間だった。

『これは重畳』

突然、脳内に声が響き渡った。ゾクツと背筋に悪寒が走る。どこかで聞いたような声だった。しかし、いったいどこで……

（ひょっとすると、空から落っこちる前、か……？）

とつさにそう思ったのは、落ちた衝撃のためか、それ以前の記憶が一切消えていたからであった。実は、自分の名前さえ覚えていない。ユアン・カイには「おまえ」や「貴様」としか呼ばれていなかったから、名などなくとも別に不都合ではなかったのだが……

「……くっ！」

いきなり、錐でも差し込まれたかのように頭が痛んだ。しかも、

痛みはどんどん強くなって行く。

「う……あ……ああっ……！」

うめいて、竜は頭を抱え込んだ。すると、そこへもう一度「声」が響いた。

『十有余年もの間、よりによって「人族」と馴れ合い、その愛玩動物にまで成り下がって何のつもりなのかと思っていたが、そうやってあの国王の信頼を得、その姿に成り代わる算段であったか。

このまま彼奴が斃れてくれれば、この国はもはや我ら「竜神族」のものになったも同然。でかしたぞ、我が子「白竜皇子・ティエン」よ……！』

はくりゆうのみこ・ティエン、だと……？

苦痛に顔を歪めつつ、竜は心中で繰り返した。まさか、それが俺の……

（……つつーか、何なんだよ、それって！）

こんな不愉快な形で自分の思考に無理やり割り込んできた存在が、自分の「親」だと？

おまけに、自分はただの竜ではなく、「竜神族」とやらの「皇子」であると……？

（嘘だろ……）

激しくかぶりを振って、ティエンは否定した。認めたくなど、あるものか——もしそれが真実であり、「声」が言外に臭わせてい

た通り、「竜神族」が「人族」を敵視し、その世界の乗っ取りまで企てているとするならば、「竜神族の皇子」である自分と「人族の王」であるユアン・カイとは、完全なる「仇敵」の間柄だったということになるのだから。

しかし、その一方で、思い当たるふしは確かにあった。

ユアン・カイに変化^{へんげ}して臨んだあの折衝のときも、戦のときも、自分でも驚くぐらい自然に頭と体が動いていたのだ。その理由が、自分が「皇子」として帝王教育のようなものを受けて育ったことにあったのだとしたら……

「……ぐあぁっ！」

さらに強い痛みが脳髄を貫き、ティエンは身をのけぞらせた。その身から、まばゆいばかりの光がほとばしり、あっという間に部屋中を覆いつくす。

すつつ、と光が消えたとき、そこに現れたのは、国王の姿でも、竜の姿でもなかった。

喩えて言うなら「竜の特徴を備えた人型の生き物」といったところか――

左右に二本の黄金の角を覗かせた銀髪に、灼熱の色の瞳を持ったアーモンド形の眼。白磁を思わせる色の肌には、伶俐な美しさを備えた顔を除いて、びつしりと細かいウロコが走っている。そして、背中が裂けた王族服から左右に伸びた、透けるような一對の大きな翼……

「我、竜神王の一の皇子、白竜なり……」

真っ白を通り越して薄紫にさえ見える唇から、うつろな声が流れ

出た。

「我の第一の使命は、仇敵・人族の完膚なきまでの殲滅……」
『そうだ！』

「声」の響きに無上の喜びが満ちた。

『その第一歩として、中つ国』の王ユアンⅡカイⅡハシムを抹殺せよ。

折りしも彼奴は精神的に打ちのめされ、無意識に己の死すら願っているところ——この機を逃す手はない。即刻、彼奴に、その手でとどめを刺してやるのだ……！』

「……御意」

うつろな声のまま、こくりとティエンは首肯した。一陣の風と共に、彼は虚空に姿を消した。

湯呑みに残った茶を、クウはずっとすすった。それから、ちらりと窓の外を見やった。

（あいつ……何やってるんだろ）

突然出て行ったかと思ったら、急に近くの大木の陰に隠れてしまった。今も着衣の一部が見えているから、そこから動いていないのは確かなのだが……どうせそこで雨宿りをするのならば、どうしてここで止むのを待たなかったのだろう？

「ああそっか、あたしの色香についついクラクラっと」

んなわけないか、と自分で否定して、苦笑する。

どちらかと言えば、むしろ気を悪くしたと考えるのが正しいだろう。性別を偽っているうえに、盗っ人稼業にまで手を染めて……軽蔑されない方がおかしいというものだ。

「ま、いつけど？」

いかにも育ちが良さそうで、言動の端々に生真面目さがにじみ出ていて……自分とは、あまりにも「違い」すぎる。

こんなことでもなければ、お互い一瞥さえせずに一生を終わっていたことであろう。所詮は「別の世界」の人間なのだ……

クウは、お茶を飲み干した。空になった湯呑みを二つまとめて桶の水で洗う。

その口から、ふう、と小さな吐息が漏れた。

「まったくもお、あんなどこにいつまでもいたら風邪引いちまうじゃないか！」

家の中に一本だけあった、半分破れかけた傘を差して外へ出る。びちゃびちゃと跳ねる泥水に往生しながらも何とか大木に近づき、相手に声をかけようとして、しかし彼女はハツとした。

木の陰から、噛み殺したような嗚咽が聞こえていた。時折鼻をすすするような音もし、肘を曲げた形で上げられた腕がごしごしと左右に動く。恐らくは涙を拭っているのだろう。

慌てて傘を閉じると、クウは、彼とは反対側の陰に身を隠した。

（泣いてるとこなんか、きつと見られたくないもんね……）

だったらさっさと元来た道を戻ればいいものを、何となくそれもできなかった。閉じた傘を握り締め、体を硬くして目を閉じる。

（いったい、何が……）

もしかしたら、「団子が食べたくて」などというのはただの方便だったのかもしれない。本当は、何かつらいことでもあって、それで家を出てきてしまったのではなからうか。もっとも、彼のような大金持ちの若様（に違いないとクウは決め込んでいた）にとってどんなことが「つらい」のかは、よくわからなかったのだけれど。

雨は次第に小降りになり、やがて止んだ。どうやら嗚咽の方も止んだ様子だったので、クウは恐る恐る幹の向こう側を覗き込んだ。そして……くすり、と笑いを漏らした。

木の根元に座り込み、幹にもたれかかって、ユアン＝カイはこっくりこっくりと船を漕いでいた。

（泣き疲れちゃったんだ……）

何だか小さい子みたい、と心で呟いて、そっと肩に手をかける。

「ねえ。こんなところで寝たら駄目だよ。ねえってば——」

その言葉が呑み込まれ、クウは大きく目を瞠った。ぐらり、と相手の体が傾き、寄りかかってきたのだ。

（あわわわ……）

どうしたら良いかわからずおたおたしていると、いきなり相手が一パチりと目を開いた。

視線がぶつかった。ほとんど同時に「うわっ！」と叫んで、二人は左右に飛びのいた。

「その……何やらまた面倒をかけたようだな」

「え？ あ、いや……たっ、たまたま起こそうとしたら、こうなっちゃっただけだからっ……」

しどろもどろのやり取りを交わすと、互いにそっぽを向いて立ち上がる。

「あ、雨、止んじやったねっ」

取ってつけたように、クウが言葉を継いだ。

「傘、要るかな、なんて思ったんだけどさあ……持って来損、みた
いな？」

「そ、そうか……それは、申し訳ないことをしたな」

ポリポリ、とユアンⅡカイは首筋を搔いた。腕組みしてしばし逡
巡したのち、

「もしや、その――」

「見てないっ！」

言ってしまったから、クウは自分が見事に墓穴を掘ったことに気が
ついた。

「やはり見られていたか」

ユアン「カイは苦笑した。

「まあ、理由はたいしたことではない。おまえのようにその日その日を懸命に生きている者が聞いたら鼻で笑いそうなくらい、取るに足らんことだ。

実際、一眠りしたらもう忘れてしまった。だから、その……おまえも、できれば忘れてくれるとありがたいのだが」

「ん……わかった」

クウはうなずいた。本当は、忘れられそうになどなかったけれど……「『忘れてしまった』なんて嘘だろ？ いいから話してみなよ。話してすっきりすることだってあるんだからさ」 そんな言葉が、喉元まで出かかってもいたけれど。

それでも、「忘れてほしい」というのが相手の望みなのならば、黙ってそうしてやろうと思った。だって、嬉しかったから――

「あの……ありがとう」

「ん？ 何がだ」

「今、言ってくれたろ？ 『懸命に生きてる』って。そんなふうに思ってもらえてるなんて考えてもみなかった。街の連中には、いつだってカス扱いしかされたことなかったからさ」

「カス？ おまえがか」

心底驚いたように、ユアン「カイは瞠目した。

「それは絶対に違うと思うぞ。

もし『カス』なる者がいるとすれば、それは、おまえをそのような境遇に追い込んだ地主とやらであり、ひいてはそのような輩をのさばらせておく為政者であろう」

「イセイ、シャ？」

「そうだ」

きつぱりと、ユアン・カイは言い切った。

「ヤツは、もともとその器などではなかったのだ。

四人兄弟の末っ子で、どうせ兄の誰かが王位を継ぐのだろうとのんびり構えていた。おまけに、ずっと国外へ養子として預けられていたせいで、国の内情にも真つ暗同然だった。なのに、先の大戦で兄二人が、病で父親と残りの兄が身罷ったために棚ボタ的にお鉢が回ってきてしまった――

もっとも、そのようなことは所詮言い訳にすぎん。王家の一員たる者、本来なら、いつそのような事態になっても良いよう、常日頃から準備と研鑽を積んでおくべきだったのだからな。

それを怠ったがゆえに、ヤツは日々の雑務に振り回され、民が本当のところどのような状況に置かれているのかといったことになど全く気が回らない――後世の歴史家がヤツを喩えるとしたら、さしずめ『暗愚王ハシム』といったところだろうな」

クウは柳眉をひそめた。

相手の喋っている言葉は彼女にとっては難解すぎて、半分以上何を言っているのだから全くなかった。が、少なくとも、彼が現国王を痛烈に皮肉っていることだけは何となくわかった。しかも、「ヤツ」という呼び方といい、国王にまつわる背景をやけによく知っていることといい……

「ねえ……もしかして、あんた——いや、あああ、あなた様は、こここ国王陛下と、ものすごく親しいお友達だったり……しますですか」

動揺のあまり、何だか言葉がめちゃくちやになる。相手が自分が推測していた以上に高貴な身分らしいとわかったからというのほもちろんのこと、先刻自分があからさまに国王批判を口にしたことを思い出したからでもあった。もし彼が国王と極めて近い関係で、その口から今回のことが伝わってしまったら……彼のような「お貴族様」（既にクウはそう確信していた）ならば許されることであっても、自分のような立場の者であれば決してそうは行くまい。

「ああああのお……あたし、ひょっとして、市中引き回しのうえ打ち首獄門、とか……？」

足元から震えが這い上がり、思わずしゃがみ込んでしまう。

（父ちゃん、母ちゃん……あたしもとうとうそっちへ行くことになっちまったよ……）

目をつぶって手をすり合わせていると、不意に、ふわりと頭に手が置かれた。

「何を言っているのだ、おまえ」

自分もしゃがみ込んでクウと目線を合わせると、ユアン＝カイは微笑んだ。

「おまえが何の罪を犯したというのだ？
むしろ、おまえはヤツの『恩人』ではないか。おまえの機転がな

かったら、ヤツは団子一本満足に食べなかったのだぞ」

「……え？」

クウは、目をしばたたかせた。それから……すつとんきょうな声を上げた。

「ええええええええつつ……？」

「……遅い。遅すぎるぞ……！」

はるか雲の上にある「天界」の宮城（みやぎ）の玉座で、竜神王は黒く長い口髭を苛立った手つきで引つ張り続けていた。

青銅色の四角張った顔もあからさまにむっとりとして、少しでも近づけば、これまた鬢（たてがみ）の如く長い黒髪の間を生えた緑青色の二本の角から即座に雷撃を食らいそうな気配である。

目の前の円卓上に置かれた水晶玉には、どことも知れぬあばら家の中で、粗末な麻の衣服に袖を通して「中つ国」国王ユアン＝カイ＝ハシム五世と、そんな彼をなるべく見ないようにしてかしまっている下賤の女の姿が映っていた。

『ああああの、すすすみません、そんな着替えしかなくて……』

『いや、あんな雨の中に傘も差さずに出て行った私がいけなかったのだ。本来なら濡れたまま帰らねばならないところだというのに……しかも、これはお父上の形見なのであろう？ 本当に感謝しているぞ』

『そそそそんな、ももももつたいない……』

ふん、といまいましげに鼻を鳴らすと、竜神王は水晶玉から顔をそむけた。

まったく、ティエンの奴は、どこで油を売っているのか——とつぐにあの場に到着し、ユアン＝カイを一撃のもとに葬り去っていてもおかしくはないはずなのに。

（……まさか）

竜神王は、不意にカツと黄金色の目を見開いた。

（「術」が破れたのでは……）

ティエンは記憶を取り戻したわけではなく、竜神王に「暗示の術」をかけられていただけだったのだ——「おまえの第一の使命は、仇敵・人族の完膚なきまでの殲滅である」と。

王としては、是が非でもそうする必要があったのだ。ティエンが王の嫡子であったことは本当だったが、「仇敵・人族の完膚なきまでの殲滅」については、むしろ真っ向から反対の立場を取っていたから。

十年前――

『何故です父上！』

確かに人族は、我々を不吉だの災いを呼ぶだのと勝手なことを吹聴しているかもしれませんが。しかし、我々の領域までもを侵そうとしているわけではない――そもそも、空を飛べぬ奴らには、我々の暮らすこの天界に足を踏み入れることさえできぬはずです。ならば、このまま波風立てることなく棲み分けておれば良いではありませんか。

それとも何ですか、どこぞの武器商人に、なかなか儲からぬからそろそろ戦^{いくさ}をせよとたきつけられでもしましたか。もしくは、そうすることで、民人^{たみびと}の不満を国外に向けさせようとお考えか？

はっ、竜「神」王などという名を戴く御方が、そこまで無能な御君主だったとは……！』

そう主張して憚らなかつたティエンは、当然の如く竜神王の逆鱗に触れ、拷問にかけられた拳句、投獄された。

ほかの者ならばその場で死罪になるところであつたが、そうならなかつたのは、主にほかに子がなかつたがゆえであつた。王位を継ぐべき嫡子がいなくなつたとなれば、いずれ、それを巡つて内紛が起こるは必定。かと言つて、全く罪を問わずに許してしまつては、ほかの者への示しがつかなくなる……それで、死なない程度に激しく殴る蹴るを加え、牢獄へ幽閉した、というわけだつた。

ところが、この「配慮」が裏目に出た。常人なら一歩たりとも動けぬ重傷であつたのにもかかわらず、ティエンは牢獄を脱して人界へと下ってしまったのだ。恐らくは、何らかの方法で人族に危機を

伝えるつもりでもあったのだろう。

無論、竜神王は即座に追っ手を差し向けた。拷問のさなかに翼をへし折られたがために満足に飛ぶこともままならなかったティエンは、あっさりと彼らの手にかかり、真っ逆さまに海へと落ちた。

『もともとのお怪我の度合いから考えても、まず間違いなく絶命されたかと』

追っ手たちはそう口を揃えた――

そのティエンが生きていて、しかも事もあるうに人族の王の一人に「飼われて」いる——そのことを竜神王が知ったのは、半年前、ティエンがユアン・カイの身代わりとして戦に出たときのことだった。

その噂は天界にまで届き、「ほう、人界にも竜神のごとき戦^{いくさ}ぶりをする者がいたのか」と、ちょっとした評判にもなったものであったが、それもそのはずだ。

ほかの者にはわからずとも、父である竜神王には一発でわかった。噂の真偽を確かめようと水晶玉を覗いたその瞬間に——両眼の奥底に熾き火の如き光を秘め、勇猛果敢に敵陣に突っ込んでいく「中つ国の王」の太刀筋は、かつて自分が手ずから教えたそれにほかならなかったからだ。

《何たるていたらくだ。竜神族の王の嫡子ともあるう者が、人族などのためにそこまで……！》

最初、竜神王はそう思い、頭を抱えた。

が、やはり水晶玉を通して、凱旋した我が子が全く誰にも疑われることなく「国王」として歓呼の声を浴びているさまを見たとき、気が変わった。

《これは、ひょっとすると「使える」やもしれぬな……》

理由はわからぬが、ともかく我が子がユアン・カイの影武者を務めているのは確からしい。ということは、いずれまたこのような機会が訪れることもあるう。

そのあかつきに、その陰でユアン・カイを消してしまえば……そ

うして空いた玉座に、暗示の術をかけて意のままにした我が子を「身代わり」の格好のままで座らせてしまえば、労せずして「中つ国」一国が手に入るではないか。ここを足がかりに、じわじわと勢力を広げて行けば――

「うつむ……」

一声唸ると、竜神王は玉座を離れた。立ち上がってみると、その偉丈夫ぶりはますます際立って見える。遠巻きに控えている家臣たちがいよいよ小さく思えるほどだ。

「やはり、わしが行かねばならぬようだな」

天井にくつつきそうな頭をかばって若干背を屈めつつ、のしのしと宮城の外へ出、何事か呟きながら両手の指で印を結ぶ。

一陣の風と共に、彼は巨大な青い竜へと姿を変えた。ぱたりと尻尾を一振りし、両眼と同じ黄金に輝く翼をばさりと広げると、青竜は一直線に「中つ国」を目指した。

「では、今度こそ帰らせてもらうぞ。本当に世話になったな」

がたついたおんぼろ扉を開けながら、ユアンⅡカイは言った。その口から、小さくため息が漏れた。

「そのようなことなどせずとも良いのに……」
「すつ、すすすみませんっ！」

土下座した格好のクウは、さらに恐縮したていで床に頭をすりつけた。ユアンⅡカイは苦笑した。

「だから、そのようにかしこまらずとも……
まあ、しかたがないのかもしれないが。そうするよう教え込んだのは、ほかでもない我が王家の先祖なのだから」

してみると、やはり「あいつ」だけが特別ということか、とひとりごちる。怪訝にクウは顔を上げた。

「あいつ……？」

「私の無二の友だ」

微笑んでユアンⅡカイは答えた。

「他国へ養子にやられていたと話したろう。その折に知り合ったのだ。今日も、留守居役を引き受けてくれている。

本人が知ったらきつとつけ上がるに違いないから直接言ったことはないが、あいつのおかげで、いろいろと救われた。他国にいたと

きも、こちらに戻ってきてからも……」

物心ついたとき、ユアン・カイは既に「下つ国」にいた。

「人質」という性格上、たとえ身内であっても「中つ国」の人間との接触は禁じられていたので（そのような人間が「人質」に刃物なり密書なりを手渡し、「人質」の預かり先である政権を内部から崩壊させたという例が過去にいくつもあつたから）、両親とも三人の兄たちとも、一度も会つたことはなかった。

そして、とうとう会うことのないまま父と兄たちは逝ってしまったわけだが、母だけは存命だった。

風の噂にそれを知って、ユアン・カイは心から安堵した。だから、十七の年、突然お鉢が回ってきた王位を継ぐため国に戻つた折には、父と長兄の葬儀を済ませるや、すぐに彼女に会いに行った。初めて相まみえる母。どのような顔をしているのだろうか。どのように自分を迎えてくれるのだろうか……

ところが、対面は叶わなかった。

『申し訳ないのじゃが、会いとうないのじゃ』

扉越しに、抑揚のない声で彼女は言った。

『そなたの姿を見たなら、「あの女」のことを思い出して、きっと冷静ではいられなくなってしまうからの……下手をすると、そなたを傷つけてしまう言葉をも吐いてしまうやもしれぬ。対面せぬ方が互いのためじゃ。』

この詫びと言つては何じゃが、わらわは明日にでも実家へ戻り、二度と王宮へは戻つて来ぬつもりじゃ。無論、そなたの執政にも一

切口ははさまぬ。それで、許してはもらえなかるうか……？」

愕然と、ユアン・カイは立ち尽くした。

たとえ妾腹であっても、王族の子どもは、表向きはすべて「王妃の子」ということになっていた。だから、このときになるまで全く知らされていなかったのだ——自分が王妃の実の子ではなかったのだ、ということ。

それからしばらくの間、ユアン・カイは狂ったように王宮を駆け回り、誰彼構わずつかまえて、自分の出自を問い質した。

『やめておけよ。それ以上何かわかったとしたって、きつといい知らせじゃねえぜ？』

白竜がそう言って止めるのも聞かずに……

そうせずにはいらなかったのだ。

「下つ国」で育ち、そこしか知らなかったのにもかかわらず、ユアン・カイの立場は常に「よそ者」だった。誰もが一線を引いて彼を眺め、時にはあからさまに侮蔑的な視線を投げたり、屈辱的なことを強いたりしてくる輩さえいた。

そんな状況下でも何とか自分を保っていられたのは、ひとえに、自分が中つ国の王家の一員であるという矜持に支えられていたからだ。自分がこの地にいることで、父も母も兄たちもきつと助かっているのだ——ずっと、そう信じていたからだ。その「よりどころ」が、揺らぎ始めている。それを止めようとして、何が悪い？

しかし、結果は白竜の言った通りだった。

……否。「それ以上」だったかもしれない。

ユアンⅡカイの生母は、王家の人間が狩りをする森を代々管理している家系の出で、あるとき森に狩りに出かけた父に見初められ、王宮へと連れて来られた。実は既に夫も子もあつたのだが、王命とあらば諾と返答するしかなかったのだろう。

その「心の無理」が祟つたのであろうか、間もなく彼女は気鬱の病を発した。毎晩のように、別れた子の名を呼びながら王宮中を徘徊して歩くのである。

それでも、新たに子が生まれればきつとそれも治まろうと父は簡単に考えていたが、現実には全くその逆だった。

懐妊の判明と共に、病はさらに進行した。そして、産み月が近くなつたある日、彼女は突然、近くにあつた果物包丁で自らを刺し貫いた。すぐに医師が駆けつけ、腹の子だけは何とか助け出したものの……

『結局、私は母に「産んでさえもらえなかった」のか……』

すべてがわかったその晩、そう呟くと、ユアンⅡカイは自室の寝台にへたり込んだ。

本当は、ずっとおかしいと思っていた。いくら四男坊とはいえ、自分だけが何故、ロクに目も開かぬうちに「下つ国」へ送られてしまったのだろうか、と。いくら直接の接触が禁じられているとはいえ、折衝などで、父と下つ国王とは何度も顔を合わせていて……その際には、自分の話題として出ていたとしても不思議はないはずなのに、何故、それが自分の耳には一切届いてこないのか、と。

しかし、それもそのはずだったのだ。自分は「本当に捨てられて」

いたのだから。そんな忌まわしい経緯を経て生を受けた「穢れた子」だったがゆえに……

『しかも、「下つ国」へやられたのは、生まれたその日のうちだったのだそうだ——恐らくその「穢れ」を嫌ってのことだったのだろ
うな』

自ずと誰かに語りかけるような口調になったのは、部屋のどこかに白竜がいるとわかっていたからだだった。

姿を消しているのは、恐らく、今のユアン・カイの様子を見て、どうしたものかと考えあぐねているせいだろう。

『実際、私の誕生を聞いても、家族の誰ひとりとして、顔を見にすら来なかったらしい。私は……私は、本当に、誰にも望まれ——』

それ以上言葉が続かず、ユアン・カイは唇を噛んだ。

だが、涙だけは何とか抑えた。白竜の忠告に耳を貸さず、「それでも構わないから」と言い切って……そんな自分がこの結末に涙するのは、きつと「間違ったこと」なのだ。だから、泣いてはいけない。我慢しなければ。我慢して、自分で、自力で乗り越えなければ

……

……すると。

周囲の空気がふわり、と動いた。ついで、くるくる、と何かが体に巻きつく気配と、ぺろぺろ、と頬を舐められる気配——

『なーにカツコつけてんだよ』

乱暴だけれどどこかあたたかい声が、脳裏に流れ込んできた。

『泣きたいときには、ちゃん泣いとけ。』

それからな、「誰にも望まれてねえ」なんて馬鹿みてえなことな
んか、二度と考えんな。少なくとも「俺は」、おまえに命助けられ
たことに感謝してるんだから——まったく不本意極まりねえ話では
あるけどよ!」

ユアン「カイは、そつと手を動かしてみた。

そこには、確かに白竜がいた。しっかりと、しかし決して締めつ
けないように、彼はユアン「カイを包み込んでくれていた——人間
で言えば、ちょうど抱きしめるような具合に。

じんわりとまぶたが熱くなった。こらえていた嗚咽が口について
出る。やがて、それは号泣に変わった。そんなユアン「カイの涙を、
白竜はずっと、優しく舐め続けていてくれた……

もちろん、ユアン＝カイは、この話をそのままクウに語ったわけではなかった。知り合つてまだほんの数刻しか経たない者に聞かせるにはあまりにも重苦しい内容だったし、だいいち、話の流れ上「あいつ」が竜であることにも言及せざるを得ない。いずれにしても、彼女には、まず受け止めきれまい。

だから、代わりに少々冗談めかして彼は言った。

「ヤツは、それ以外の点でも何かとよくできた男だな。おかげで私のお株を奪う働きをされてしまうこともあつて……」

実は、先ほど少々落ち込んでいたのもそれが原因だったのだ。もしかすると、ヤツに代わりに仕事をしてもらった方がよほど国のためになるのではないか、と……無論、一時の気の迷いだったのだが「そうか、それは残念だな」

だしぬけに、割れ鐘のような声が響いた。クウが悲鳴を上げて腰を抜かし、ユアン＝カイもぎよつとして振り返った。

「貴様、何奴だ……!!」

「天界に住まいし竜神族の王だ」

竜神王は、青竜から人の姿へと戻っていた。それでも、人間としては長身の部類のユアン＝カイより、さらに縦に一回り、横には三回りは大きく見える。

「息子のティエンが随分と世話になったようだな」

長い口髭をもてあそびながら、彼は、感謝のかけらもない表情で

不敵に嗤った。

「世話になりついだと言っては何だが、本当にあやつに王位を譲ってはいくまいか？」

もつとも、否と答えられても結果は同じだがな——今ここで、貴様はわしにやられてあの世へ行くのだから！」

去っていたはずの雷雲がみるみるうちに上空に集まり、激しい稲光が辺りを包んだ。

ドーン、という音と共に、稲光は一旦竜神王の緑青色の角に落ちた。間髪を入れず、目の眩むような光が放出される。とっさに建物の外に飛んで、ユアン「カイはどうにか雷撃から逃れた。とたん、その表情が凍りつく。

さっきまで建っていたはずの建物が、木っ端微塵に倒壊していた。彼自身が立っていた場所には巨大な穴が穿たれ、かすかに煙さえ上がっている。

「言っておくが、今のはほんの挨拶代わり。わしの本来の力の一割にも満たぬぞ」

早くも勝ち誇ったように、竜神王が言い放った。そのいかつい顔が、ふと楽しげににやりとする。

「ほう。てっきり恐怖に恐れおののかかと思っていたが」「誰が！」

ギリリと歯噛みすると、ユアン「カイは竜神王を睨んだ。当たり前だ。建物の中にはクウがいたのだ。この分では、恐らく彼女は……

「何故だ……何故罪もない民人まで……っつ！」

それはまた、自分自身へ向けての言葉でもあった。

無論、その威力を考えると、自分が雷撃をよけずにいたとしても結果は同じだったろう。が、せめて、何故彼女をかばう方向へ動いていなかったのか……

否、それ以前に、自分がふらふらとこんなところへ来てなどいなかったら。「あいつ」——どうやらティエンという名であるらしいあの白竜の言う通り、王宮でおとなしくさえしていたら……！

「おのれ……！」

一声叫ぶと、ユアンㇿカイは相手の懐へ飛び込んだ。こうなったら、せめて相手の息の根だけでも止めなければ……

勝機は、決してないわけではなかった。雷撃は確かに強力だが、ある程度間合いを取らねば自らも巻き込むことになる。その間合いの内側に何とか潜り込むことができれば、相手は反撃不可能になるはず……

「むうつ？」

さすがの竜神王も、虚を衝かれたかいささか反応が遅れる。ユアンㇿカイの唇に、会心の笑みが浮かんだ。

（もらった……！）

護身用に携えていた短刀を抜き放つと、彼は、それを竜神王の心の臓めがけて力一杯振り下ろした。

……はずであった。

(……何っ?)

信じられない、という思いが脳裏を走った。と同時に、ユアン・カイは短刀もろとも弾き飛ばされていた。つまり、短刀は相手の皮膚に刺さりすらしなかったのである。

「言っただであろっ、わしは竜神の王だと!」

竜神王は、からからと哄笑した。

「竜のウロコは強靱ぞ。人族などの作ったそのような玩具が通用すると思うてか!」

二本角に、再び稲光が集まってくる。それを察して動こうとしたユアン・カイは、しかし、うっと呻いて顔を歪めた。

(足が……!)

地面に叩きつけられた瞬間に傷めたらしい。足首に力が入らず、立ち上がることもできない。

今度は竜神王が、会心の笑みを浮かべる番だった。

「これで終いだな、『中つ国』のヒヨッコ王よ。もはや、この国はわしのものだ……!」

両角に満ち満ちた稲光がさらに増幅され、解き放たれる。ユアン
「カイは思わず目を閉じた。万事休す、か――

――ところが。

ドドーン、という音とほとんど同時に、何かが雷撃を受け止めていた。ユアン「カイ同様、雷撃の主に比べたら確実に縦に一回り、横には三回りは小柄ながら、同じようにゴツゴツしたウロコに覆われた真っ白な体。ユアン「カイをかばうかの如く目一杯に広げられた、真っ白な翼……

「悪いな、遅くなっちまって」
「^{わり}

ちらりとこちらを振り返った口元に、にんまりと笑うように牙が覗く。おまえ、どうして――と問い質しかけたユアン「カイの視線が、目の前にぶら下がった相手の尾に釘付けになった。その先端部分は真っ赤に染まり、鮮血がだらだらと地面に滴り落ちていく。

「ああ、これな」

事もなげにティエンは言った。

「うつかり、そこにいるクソ野郎に『おまえを殺せ』なんてアホみてえな『術』かけられちまってな。

幸い頭の方はすぐに正気に戻ったんだが、体の方がなかなか……ちよつと氣い抜くと勝手におまえの方に行つて雷撃食らわしまいそうになるんで、尻尾に噛みついて自分で自分動けなくしてたつてわけ。

だけど、もう大丈夫だ。今の雷撃食らった衝撃のおかげで『完全復活』できたんでな。ついでに、ずっと忘れちまってた記憶もバツ

チリ『補完』できちまつたぜ」

怒りを帯びた灼眼が、真っ向から竜神王を射る。

「ったく、なあにが『人族の殲滅が俺の使命』だよ。嘘ばっか刷り込みやがって——俺は、使命受けてたどころか全くの反対派だったんじゃないか！」

「相変わらず威勢だけはいいことだな、ティエンよ」

竜神王はふんと鼻を鳴らした。

「おまけに、十年の間に随分とガラが悪くなったものだ。これも人族から良からぬ影響を受けたがゆえか。
まあ良い。わしに従わぬと言うのなら、そなたもまとめて片付けるまでよ！」

指で印を結び、自らも再び青竜の姿に戻る。

いよいよ瞠目したユアン「カイをよそに、二頭の竜は鋭い咆哮を交わし合い、まず白竜ティエンが、ついでそれを追うように青竜も、夜空の彼方へ飛び去った。

雲間からかすかに雷鳴が響き、雷光の応酬が始まった。

（戦い始めたのか……）

もしかするとティエンはあえて空を選んだのだろうか、とユアン「カイは思った。

竜神王一人の雷撃でもこのありさまになったのだ。竜どうしが地上で戦えば、どんなことになってしまうのか……それが予測できなかったからこそ、わざわざ相手を上空へと誘い出したのかもしれない。

その判断は、別の意味でもユアン「カイにとっては幸いだっただけだ。突然の出来事にいささか混乱していた頭を整理する機会に恵まれたのだから……

「竜は災いを呼ぶ」——その言い伝えの根拠のひとつに、この近在の国の人々なら誰もが一度は聞いたことがある伝説があつた。

数千年前までは、竜も人も同じ地上で暮らしていたのだが、あるとき両者の間で大規模な戦が起こつた。空を飛べ、雷を操る術にも長けた竜は最初優勢を誇っていたが、やがて、おごり高ぶりでもしたのか、ほんのちよつとしたことから形勢を逆転され、敗者となつてしまった。以来、竜たちは天界に居を移し、人に復讐する機会を狙っているのだという——

（あれは、まことであつたということなのか……）

そして、竜神王はいわゆる「強硬派」の急先鋒であり、ティエンは、彼の息子ながら「穏健派」として父の方針に異を唱えていた。地上に落ちてきたのは父との対立がきっかけだったのであり、そのまま地上にとどまつたのは、記憶を失つて、自分がどの誰かもわからなくなつてしまつていたからだつたのだろう。

ところが、そんなティエンの消息が、それから十年を経た今、何かの加減で竜神王の耳に届いた。しかも、ティエンが身を寄せているのは、人界の王ユアン・カイのもとだという。そこで、竜神王は、ユアン・カイを亡き者とし、その後釜に、「術」とやらによつて自分の意のままにしたティエンを据えるという計略を思いついた……

（……にしても）

忸怩たる思いで、ユアン・カイは天を仰いだ。

いくら竜のウロコが衝撃に強いとはいえ、あの体格差では、最終的な勝敗は決まったも同然だろう。それを知りながら、こうして地上で手をこまねいているのは、あまりにももどかしかった。

もつとも、たとえ空を飛んでティエンの元へ行けたとしても、かえつて足手まといになるのではという気もしたが——そうでなくと

も太刀は通用せず、あまつさえ手負いの身ですらあるのだから。

（ならば、私はいったいどうしたら……）

深々とため息を漏らしたそのときであった。背後に何者かの気配がした。怪訝にユアン「カイは振り返り……息を呑んだ。

「おまえ……！」

我知らず立ち上がり、一歩二歩と歩み寄る。

「無事だったのか！ 怪我は——」

言いかけた声が次の瞬間情けない悲鳴に変わり、ユアン「カイは、かつくん、とその場にくず折れた。

「あーあー」

そんな彼をしっかりと支えると、クウは埃とすすとにまみれた顔に苦笑を浮かべた。

「あんたの方がよっぽど問題ありじゃないか」

「ちょっと痛いけど我慢しなよ」

そう前置いて、クウはユアンⅡカイの足首をつかみ、くいつとひねった。ユアンⅡカイの口から呻き声上がり、顔が大きく苦痛に歪む。

だが、一瞬ののち、彼は驚愕した表情を見せた。

「これは、また……」

痛みも違和感も、魔法にでもかかったかのように消し飛んでいた。

「すごいものだな」

「まあね」

クウは胸を張った。

「父ちゃんが骨接ぎの仕事もしてたんで、見よう見まねでね。あたしら、医者にかかる金なんかないから、何でも自分らでするしかないんだよ」

「そうか……」

相槌を打ってから、ユアンⅡカイは、おや、と思った。相手の態度が元の調子に戻っている。いったいどうした心境の変化だろう？しかし、それを指摘して、またかしこまられてしまっても何だし……つらつらそんなことを考えていると、それを読んだかのように相手が言った。

「家が崩れてきたときにね、あたし、もう駄目かと思ったんだ。だけど、気がついたら助け出されて……」

まだ若いのにジジババみたいに真っ白い髪して、目もウサギみたいに真っ赤で、何だか不思議な感じの人だった。けど、王族の服を着てたから、たぶん、あんたが留守居役を頼んだ友達って人だったのかな。

で、その人が言ったんだよね。『これからもずっと、カイの友達でいてやってくれないか』って。

そんなこと、頼まれなくっても一緒だったとは思うけど——だってあんたってば、団子一本まともに買えないほど世間知らずだし、走りながら団子食って喉に詰まらせちゃうほどドジだし、おまけに雨の中に飛び出してってガキみたくめそ泣いたりするし……正直、情けなさすぎて、とてもじゃないけど『敬う』気になんかなれないな——って思ってたところだったからさ。

ま、ダチぐらいでちょうど？ いや、むしろ『子分』で十分、みたいなの？」

どう返答したら良いものやらわからず、ユアン「カイはポリポリと首の後ろを掻いた。

先刻より大きな雷鳴が轟き、稲光であたりが昼間のように輝いた。はっとユアン「カイは空を見上げた。嫌な予感が脳裏をかすめる。

(あいつ……)

ひよっとしたら、死ぬ気なのかもしれない。

『これからもずっと、カイの友達でいてやってくれないか』

そんな殊勝な言葉など、あの竜——ティエンには似合わない。な

のにあえて彼がそれを口にしたのは、「自分はもう友達でいてはやれないかもしれないから」という思いが胸中にあつたからなのではないか。

彼我戦力の差は歴然。それはティエンとて——否、竜神王の息子の彼だからこそ、当然承知しているはずだ。その差を埋めるためには、相手と刺し違えるしかない。もしも、彼がそのように考えていたとしたら……

「またそうやって泣いて」

クウにそう言われて、ユアン「カイはいつの間にか自分の頬を涙が伝っていたのに気づいた。

「こっ……これは悔し涙だ！」

慌ててこぶしでそれを拭くと、ぶっきらぼうに彼は主張した。

「さっきの竜神の王とやらを見ただろう？ あれの懷に、一度は飛び込むことができたのだ。だが、仕留め損ねた。皮膚が頑丈すぎて短刀が通らなかつたのだ。そのときのことを、ふと思いついてしまつてな」

決して嘘はついていない。実際、あそこで相手の心の臓を一突きすることさえできていたら……

無論、それはすなわちティエンの父親を殺すということでもあるけれど、その責めは自分が負えば良い。こうして白竜自身に、圧倒的に不利な、しかもいくら対立しているとはいえ父子どうしには違いない哀しい戦いを強いることに比べたら、そちらの方がどれほど気が楽か知れなかつた。

「せめて、あの硬いウロコを何とかできれば……」

腕組みしてひとりごちたときだった。あ、とクウが呟いた。

「もう一つ、あの人からの伝言があつたんだわ」

はじかれたように、ユアン¨カイは相手を見直した。

息がだんだん上がってきた。目もチカチカと眩んでいる。尾の噛み傷からの出血も、確実に体力を奪いつつある。小回りの良さが幸いして雷撃そのものは一度も食らってはいないが、そろそろ「限界」が来ているかもしれない。

もつとも、そんなティエンにさんざん翻弄された竜神王も、似たり寄つたりの状況に陥りつつはあるようだった。

「小賢しくチヨロチヨロと……」

言いかけた語尾が、やや荒い息づかいに取って代わる。

「つたりめえだ、ろ……」

呼吸を整えながら、ティエンは相手を睨めつけた。

「あんたのこつた、一発でも雷撃当てたらまたさっきの『術』をかけるつもりなんだろうからな。だあれがそんな手になんぞ乗ってるもんかよ！」

ふん、と竜神王は鼻で嗤った。

「何にせよ、随分としぶといことだ。それほどまでに、あのヒヨッコ王が大切な」

「ああ、大切だとも！」

相手を見据えたまま、ティエンは言い切った。

「あんたはさつき、俺があいつの『愛玩動物』だ、なんぞと抜かしやがったな。

冗談じゃねえ！ 俺はな……俺は、あいつの『マブダチ』なんだよ！

あいつは言ってくれたんだ。俺に何度も救ってもらったって……だから、自分にとって俺は『無二の友』なんだって！

それは、俺にしても同じだ。

いくら大怪我をしていて記憶も失っていたとは言っても、竜は竜だ。まして、そんなとき、あいつはまだ十^{とお}になるやならずのガキだったんだ。やれ疫病神だ、災いの元だなんて話だって、頭っから信じて疑わない時期だっただろうよ。

なのに、あいつは黙って俺を受け入れてくれた。痛くはないか、薬はしみないかって気づかないながら傷の手当てをしてくれて、そのあとは、ずっと懷の中に俺を入れてくれて……俺をつぶさないようにって、寝るときにも横にならずにさ。

そして傷が治ってからも、俺を追い出すことなくずっと傍に置いてくれた。立場上ほかの人間には言えないようなことも俺にだけはこっそり打ち明けてくれたし、時にはその流れで、あいつの『預けられ先』の『下つ国』の王宮の連中に二人して一泡吹かせて溜飲を下げた、なんてこともあった。

そうやってずっと、俺らは楽しいことも苦しいこともみんな共有してきたんだ。人どうし、竜どうしの『友達』ってヤツと何にも変わりねえよ。

だからこそ、俺は何が何でもあいつを守る。あいつの国のこともな！

あんたなんかの好きにさせてたまるかよ……！」

最後の叫びと同時に、金の二本角が激しく強烈な光を放つ。鬣^{たてがみ}数

本ほどの僅差でその雷撃から逃れると、竜神王は再び、ふんと嗤った。

「なるほどな。たいそう麗しい『友情』だ」

その表情が、次の瞬間一転した。黄金の目が三角に吊り上がり、くわっと牙がむき出される。

「だがなティエン、そんなものは所詮まやかしにすぎん。

騙されてはいかんぞ。人族など、信用してはいかん——いついかなるときに、こちらを裏切るかわからぬからな！

実際、それはおまえとて身にしみて承知していたはずではないのか？ それとも、あまりに幼すぎたゆえに、そこまでの記憶は戻らなんだか」

ピクリ、とティエンの眉が動いた。

やはり動揺したか——竜神王は内心ほくそ笑み、さらにもう一発「爆弾」をぶち込んだ。

「そつだ、思い出すのだ。

おまえから母親を奪ったのが、誰であつたのか。誰の邪魔もせず、『あの森』でひっそりと暮らそうとしていた我ら親子の幸せを奪ったのが、いったい誰であつたのかをな……！」

蛙の親は蛙、とでも言うべきであろうか。

実は竜神王自身にも、王太子・青竜皇子せいりゅうのみこと呼ばれていた頃に、「人族を殲滅せよ」という「竜神族の大義」に疑問を感じ、父であった先帝に抗っていた時期があった。息子と同様に父先帝の差し向けた追っ手によって攻撃を受けた彼は、「中つ国」の大きな森の中に墜落した。

そのときたまたまその森に狩りに来ていたのが、「中つ国」の先王ユアン・ナスル・ハシム四世であった。そして青竜は、事もあるにユアン・ナスルの眼前に墜落してしまった。人族の間で竜がどのような扱いを受けているかを知っていた青竜は、当然死を覚悟した。

ところが、ユアン・ナスルは何も言わず、何も問うこともなく青竜の傷を手当てし、「ここは人に見つかりやすい。もう少し森の奥へ行って隠れているように」と言い置いて去って行った。

しかも、ユアン・ナスルはその後折に触れて青竜のもとを訪れた。時には酒のビンを提げ、時には異国から献上されたという珍しい食べ物なども携えて……

種族こそ違え、同じ王族の立場にある者どうしである。じきに二人は意気投合した。

『ここに来るとほっとする。ここならば、立場も何もないただの男に戻るからな』

『おまえと出会えて良かった。ほかの者には言いにくいことでもおまえになら話すことができる。おまえこそ、私の無二の友だ』

ユアンⅡナスルは口癖のようにそう繰り返し、そんな彼に、青竜もまた次第に信頼を寄せるようになって行った。

ところが、数年後、その関係が一変した。

ユアンⅡナスルの勧めと口利きによって、青竜は人の姿に変化^{へんげ}し、森の管理人の下で働くようになっていた。管理人には年頃の娘が一人おり、青竜と彼女とは、いつしか心を通わせるようになった。

無論、正体が正体だったので、青竜としては関係をそれ以上に進めるつもりはなかった。だが、あるとき、体調を崩していたがゆえに人の姿を保っていらなくなり、物陰でこっそり竜に戻ったところを彼女に見られてしまったことが、事態を急転させた。

てつきり悲鳴でも上げて卒倒されるのではないかと青竜は思ったのだが、そうではなかった。逆に青竜をぎゅっと抱きしめると、彼女は優しく呟いた。

『どんな姿であっても、あなたはあなたよ……』

かくて、彼らの仲は急速に進展した。そして、青竜の働きぶりをかねてから認めてくれていた管理人の許しもあって、二人は結婚し、管理人の番小屋に程近い場所に新居を構えて暮らすことを決めた。

ところが、顔を見せたユアンⅡナスルにこのことを報告すると、彼は複雑な表情になった。

『まあ……よくよく考えた上のことであろうから、私にとにかくは言えんがな』

とだけ言って、それっきり彼は沈黙し、以後ふつつりと姿を見せ

なくなつた。

これはどういふことなのだ——青竜はとまどい、考え込んだ。ただひとつだけわかつたのは、相手がこの話に本当は反対だつたのだということだけだつた。しかし、いったい何故……

そして、さらに幾星霜かの月日が流れた。

天命尽きて亡くなった管理人から全面的に仕事を引き継いで、青竜は森の見回りと木々の手入れになお一層励む日々を送っていた。

夫婦の仲も円満そのもので、二人の間には一粒種のティエンが生まれていた。実のところ、種族が異なるがゆえに子のことはあきらめていたのだが、管理人の死後程なく、まるでその生まれ変わりででもあるかのように、妻の胎内に命が宿ったのである。

人の血を半分受け継いでいたからか、あるいは発達の途上であったからか、ティエンは今よりもさらに人族に近い姿をしていた。肌のウロコはせいぜい鳥肌程度にしか見えなかったし、頭の角も背中も翼も完全には生え切っておらず、小さい瘤ができているような印象しかなかった。白い髪と赤い眼だけは当時から人目を引いていたが、それも、あくまで「人目があれば」の話で……少なくとも鬱蒼たる森の中でこっそりと暮らしている分には、誰にもわからぬことであつた。

つまり、青竜側には何の不都合もなかったのである。誰に邪魔されることも、誰を邪魔することもない、平和で穏やかな日々……ずっとそれが続くと思っていた。

……「あの日」が来るまでは。

それは、ティエンが間もなく七つの誕生日を迎えようとしていたある日のことであつた。

森に何者かが付け火をした。青竜とその妻の奮闘も空しく火は瞬く間に燃え広がり、やがて森の大半を焼き尽くした。

鎮火後、青竜は王宮警察の「火付け取締役」の元に引き出され、鞭打ちの末、投獄された。そのこと自体には、青竜本人も異論はなかった。森の管理を任された者として、当然の処置だと思ったからだ。

ところが、数日が過ぎた頃、牢番たちがこんな噂をしているのを聞いてしまった。

『聞いたか？ あの森番の嫁さん、陛下のところへ召し出されたらしいぜ』

『ああ聞いたとも。何でも、陛下が狩りに出かけてあの嫁さんを見初めたとか……』

『なあなあ、ひよつとして、今回の付け火って、そのあたりがからんでるんじゃないか？ ほら、例えば、陛下があの嫁さんを妾にほしって言ったのに森番がそれを断ったから、とか』

『つまり「制裁」ってわけか。おまけに、森番を牢屋に放り込んでしまえば、嫁さんのことは思いのままだもんな。うんうん、あるかもしれないねえぞ……！』

その晩、青竜は久方ぶりに竜の姿に戻った。

雷撃を一発見舞っただけで、牢の鉄格子は簡単に吹っ飛んだ。一吼えして外の世界へ出ると、彼はまっすぐに王宮を目指した。確かめなくては。牢番たちの噂が他愛のないほら話なのか、それとも真実なのかを……

できれば前者であってほしかった。実際、妻をどうこうなどという話は、自分とユアン・ナスルとの間には全く出ていなかったのだから。

だが、その一方で、嫌な予感も拭えなかった。以前、ユアン・ナスルが見せたあの反応——あれは、もしかして、彼もまた妻のことを好いていたがゆえのものではなかったのか。それで、それ以来、

何とか彼女を我が物にせんと、機会を狙っていたのだとしたら……？

警備の者に見つからぬよう姿を消すと、青竜はこっそりと王宮の窓という窓を覗いて回った。自分の勘違いであつてくれ……そう心に念じながら。

しかし、いくつ目かの窓を覗いた瞬間、彼は愕然とした。そこにいたのは、間違いなく妻であつた。そして、彼女の傍らに立ち、その体を抱きしめ、優しく愛撫していたのは……

無論、その場で雷撃を発し、二人を焼き尽くしても良かった。だが、王族としての矜持が、かろうじてその衝動を抑え込んだ。

窓から中へ入り込むと、青竜は人の形となつて姿を現した。

『見損なつたぞ、ユアン！ それに、おまえもだ！』

一声叫んで、彼は二人を睨めつけた。

ふと視線をめぐらせると、部屋の隅でぶるぶると震えているティエンが目に入った。ずかずかと彼に近づき、青竜はその体を抱え上げた。かあさま、と涙声で言つて、ティエンは足をバタバタさせ、妻もまた何事か言いかけたが、青竜は一切を無視した。

下手な言い訳など、聞きたくはなかった。何があつたにせよ、こういうことになる前に、毅然と断れば良かったではないか。それなのに、それを受け入れたばかりか、よりによって自分の子の目の前でこのような……！

「人族」とは、かくもいい加減で汚らわしいものであつたのか。だとしたら、そんな「人族」の中に、これ以上我が子を置いておく気になどなれるはずがあるうか。絶対に連れて帰らなければ——自分たちの「真にいるべき場所」へ。

『この恨み、いずれ必ず晴らさせてもらふ。貴様らのような小賢し

いやり口ではなく、正々堂々とな！』

きっぱりと言い切ると、青竜は再び竜へと姿を変え、天空高く飛び去った――

「思い出すのだ、我が子ティエンよ！」

凍りついたように立ち尽くしている息子に向かって、竜神王は繰り返した。

「『中つ国』の前の王ユアン^{さき}ハスルハシムは、おまえから母を奪った張本人ぞ！　そして、おまえの母もまた、おまえを捨ててそのような男に奔り、あまつさえ彼奴^{きやつ}の子まで生^なした汚らわしき売女^{ばいた}——所詮、人族などその程度の卑しい生き物よ。

しかも、おまえが『友だ』と言い切ったあの男ユアンハシムこそ、まさに彼奴ら二人の間に生されたその子どもにほかならん。つまり、おまえたちは『友』などではない！　むしろ『宿敵』と言っても良い間柄なのだぞ……！」

「宿、敵……」

ティエンは呟いた。妙にうつろな口調だった。竜神王は、息子に語りかけつつ、その陰でこっそりとあの「術」をかける印を結んでいたのである。

「ユアンハシムは、我の倒すべき敵……」

「そうだ！」

満足気に竜神王はにやりとした。

「さあ、もう一度下界へ下り、彼奴の首を取って参れ。

そして、彼奴に代わっておまえが『中つ国』を統べるのだ。それこそが、あの二人の裏切り者に対する何よりの復讐ぞ！」

「御意……」

こつくりと、ティエンはうなずいた。白い翼を広げると、彼はふわりと舞い上がった――

「……なあんて、な」

竜神王の黄金の目が信じられないものを見たかのように見開かれたのと、一発の雷撃が真正面からその顔を見舞ったのがほぼ同時だった。

完全に不意を衝かれた王は、雲間から一気に下界へと落ちた。と思う間もなく、どこからか一直線に飛んできた何かが左目にぐさりと突き刺さった。ユアン「カイ」の短刀だった。絶叫にも似た咆哮が四方を揺るがす。

が、それで終わりではなかった。

天上から、眩い二つの光が降ってきた。ティエンの金の二本角に宿った雷の光であった。短刀を抜こうとした竜神王の手ごと刀の柄に巻きつくと、ティエンは刃に角を押しつけ、たまった雷の力を一気に放出した。再び断末魔の如き咆哮が響き、あたりがパアツと昼間のように明るくなった。

ユアン「カイ」は、しばし瞠目してそれを見つめた。

『ヤツが次に現れたら目の玉を狙え』

それが、ティエンがクウに託した第二の伝言だった。

なるほど、とすぐに合点が行った。ウロコは竜の皮膚の一部である。すると、皮膚で覆われていない目玉には、ウロコも生えていないというわけだ。ウロコさえなければ、短刀で突き通すのも造作な

いこと——そこで、竜神王が落ちてくるや、すかさずその目をめがけて短刀を投げたのである。

もつとも、短刀が刺さったあと何をどうするのかは皆目見当がつかなかったのだが、それも、今の様子を見て理解できた。短刀は鉄でできている。雷は鉄に極めて落ちやすい——この原理を使い、テイエンはユアン・カイの短刀を通して雷を竜神王の体内に直接送り込んだのだ。いくら強靱なウロコを持つ竜神王とて、体の内部にじかに雷撃を食らってはひとたまりもないはずであった。

実際、竜神王の巨大な体は何度も苦痛にのたうつた。そのたびに振り落とされそうになりながらも、テイエンは必死に刀の柄に巻きつき、雷撃を発し続けている——それに気づいた瞬間、ユアン・カイは息を呑んだ。

（まさか、あいつ……！）

これほどの至近距離で雷を落としているのだ、本人とてただで済んでいるわけがない。竜神王と同じか、あるいは体の小ささの分、それ以上の負担がかかっているはずだ。これでは……このままでは……！

「何をやっているのだ、馬鹿者が！」

叫ぶなり、ユアン・カイは雷撃の光の中へ飛び込んだ。この場から相手を引き離すべく、短刀ごとその体をむんずとつかむ。

とたん、バチーンという衝撃が体を貫いた。声一つ発するいとまもなく、ユアン・カイはその場にバタリと倒れた。

きゅるるるーん！

まるで悲鳴か慟哭でも思わせるような鋭い声が響き渡った。ユアン「カイに「危ないから離れているように」と言われて、彼が涙を拭っていたあの太木のそばの茂みの陰に隠れ、目と耳をふさいで身を縮めていたクウは、恐る恐るそこから顔を出し……仰天した。

そこには、「災いの元」がいた。それも、二頭も。

一頭は巨大な青い竜で、小山ひとつ分はありそうな体をぐったりと地に横たえている。そして今一頭は、人間の男ぐらいの大きさの白い竜。こちらは、やはり地面に横たわった何かを、いささかうろたえたような様子で繰り返しつつき、きゅう、きゅうと呼びかけるように鳴いている。その「何か」を視認して、クウはますます仰天した。

「カイ……！」

とっさに飛び出し、相手に駆け寄ろうとする。と、白い方の竜が行く手を阻んだ。きゅう、きゅうと警戒音のようなものを発し、翼を目一杯広げてぶるぶるとかぶりを振る。その真っ赤な瞳には、見え見えがあった。

『これからもずっと、カイの友達でいてやってくれないか』

ついさっき、自分に向かってそう懇願したあのまなざし――

「あんだ……もしかしてあのときの？」

国王の「無二の友」がまさか竜だったなどとは、普通の状況ではとても信じられなかっただろう。だが、そもそも国王が自分の前に団子を食いに現れたということ自体、十二分に信じ難い出来事だったのだ。このうえ何がどう判明したとしても、「ああそうかい」とあっさり受け入れられそうな気がクウにはしていた。

むしろ受け入れ難かったのは、すぐそばで、仰向けになった格好でピクリとも動かないユアン。カイの姿の方であつた。

「ちよつとあんた！」

白い竜の肩口をひつつかむと、クウは詰問した。

「何があつたんだよ？ あんたたち、こいつに何したんだよ！」

きゅるる……と悲しげに鳴くと、竜はうなだれた。思わず緩んだクウの手元から離れると、竜は再びパタパタとユアン。カイの方へ飛んで行き、心の臓の鼓動を確かめるかのように彼の胸元に耳を当てた。

とたん、ビクンとその身がすくむ。きゅうーん、きゅうーんと激しく呼びかけると、白い竜は、何度も何度もユアン。カイの頬をなめ、かぶかぶとその腕を甘噛みした。

愕然と、クウはそれを見つめた。これは……まさか、ユアン。カイは……！

「心の臓が止まったか」

不意に、しゃがれた声が割って入った。ひつとクウは息を呑んだ。いつの間にか青い竜の姿が消え、代わりに、先刻見た竜神王が立つ

ていた。時折ふらつきながらも、のしのしとこちらへ歩み寄ってくる。

白い竜が、かん高くキーッと一鳴きした。キーッと、キーッとさらに警戒音を発すると、今度は竜神王からユアン「カイを守るうとするかのように、精一杯翼を広げる。

しかし、竜神王は全く意に介さなかった。遂にユアン「カイの傍までやって来ると、割れ鐘のような声で彼は一喝した。

「そこをどけティエン！ 手遅れになっても構わぬのか」

ティエンの目に、驚きが走った。

竜神王はユアン「カイの前に屈み込み、両手を彼の胸に置いた。緑青色の二本角に、ぼわん、とほのかな光が点る。と同時に、手元でバチン！と雷撃の音がした。ユアン「カイの体が、まるでバネ仕掛けの人形のようにのけぞって跳ねた。

「ちょっとあんた、何を……」

驚いたクウが、慌てて食ってかかろうとする。それを、背後から伸びてきた手がそっと制した。

「大丈夫だ。これは医療術の一種だから」

怪訝に振り返ると、さっきまでそこにいたティエンが人の姿に変わっていた。青竜が巨大すぎたせいか、竜体でいたときにはえらくチビに見えたティエンだが、こうして人となってみると、ユアン「カイとさして変わらぬ長身であった。色こそ違えど理知的な印象のある双眸もどこか彼と似通っていると思うのは、果たして気のせいだろうか。

その瞳を父親の手元に向けると、ティエンは続けた。

「ああして心の臓に刺激を与えているんだ。うまく行けば、もう一度動き出すかも——」

言葉が途切れ、眉をしかめて彼は顔をそむけた。理屈はわかっていても、見ていられないのだろう。それはクウにしても同じだった。バチン、バチンと音がするたびに二人は身をすくめ、祈るような視線をユアン「カイに向けた。

そんなことが、何度繰り返されたのか——やがて小さく咳き込む音が聞こえ、それをきっかけに、胸が上下し始めた。鼓動と呼吸が戻ってきたのだ。

「ああ……」

へなへなと、ティエンがその場に座り込んだ。何かを抑え込むように数回肩で息をすると、彼は言った。

「父上——」

「礼なら要らんぞ」

ぶつきらばうに竜神王は遮った。

「これは、ただの気まぐれよ。おまえたちのあまりのうつけ加減に、つい心が動いただけのこと」

ゆつくりと立ち上がると、天を仰ぐ。

「あのままこやつが飛び込んで来なければ、おまえは自分の発した雷撃に自らも焼かれて死ぬところだった。そして、おまえはその覚悟を決めておった。それでわしが倒れ、その結果としてこやつが救われるならば、と。父の命よりも、自分の命よりも、こやつが第一……そう思っておったのであろう？」

それは、こやつにしても同じことよ。人が雷の中に飛び込めばいいのだ。どのようなことになるのか——学問を一通り修めた王族なればそれがわからなかったわけではあるまいに、おまえを救いたいが一心得……

ユアンも——そやつの父親も、かつてはそんな大うつけであった。

あれは……そう、二人で川に釣りに出かけたときだ。足元が悪くてすっかりわしは水に落ちてしまった。そうしたら、あやつ、泳ぎが苦手なくせに何のためらいもなく飛び込んできおって……結局溺れて、ちょうど今のようなさまでわしに救われる羽目になってな。もつとも、わしはわしで、二人で狩りに出かけた折、襲いかかってきた大熊からあやつをかばって腕の肉を派手に食いちぎられたことなぞもあつたのだが」

深いため息がその口から漏れた。

「そうだ……あの頃は、わしらとておまえたちと同じようだった。互いのためなら命を投げ出しても良いとすら思っていたのだ。それなのに……いったいどこで、どうして変わってしまったのだろうか」
「……違う」

不意に、ぼそりとティエンが呟いた。竜神王は胡乱げに聞き返した。

「何だと……？」

「違うのです、父上」

今度ははっきりと、ティエンは繰り返した。

「その後のことは存じません。が、少なくとも私が覚えている『ユアンおじ様』——前の『中つ国』^{さき}国王陛下は、父上を『裏切つて』などいらつしやらなかった。

あのととき……父上が突然飛び込んで来られたあのととき、母上には既に気鬱の病の兆候が出ていました。恐らく、火事のことや父上が投獄されたことで、心労が重なったがゆえにだったのでしょうか。

そんな母上を、おじ様は懸命になだめておいでだった——ただそれだけのことだったのです。

だいたい、本当に母上に対する下心があつたのなら、私まで王宮に連れてくるはずがないでしょう。『その手のこと』には、子どもなど邪魔なだけなのですから……

ですが、おじ様は、我々を迎えに来て下さったとき、まず最初に私を抱き上げて、怪我はないか、怖くはなかったかと心配して下さいました。馬車に乗っている間も、御自ら私をお膝に乗せて、父上との様々な思い出話など聞かせて下さって……

実は、その折に、父上への伝言も頼まれたのです。『長いこと無沙汰をしていて、本当に済まないことをした』と——

父上が母上と所帯を持つことに、おじ様は決して反対だったわけではなかったそうです。むしろ、たったひとり故郷を離れて異種族の中で懸命に生きてきた父上が幸せをつかんだことを、とても嬉し

く思われていた――

ただ、家族ができれば、その分身動きも取りづらくなる。独り身ならば、たとえ誰かに見つかったとしても姿を消すなり飛んで逃げたりできるけれど、妻女を連れていては、それはいささか難しくなる。まして、子でもできればなおさらなのではないか、と……それで、ご自分は距離を置こうと決めたのだそうです。

無論、どうしていきなりそのような話になるのかと私は疑問に思いました。すると、おじ様はこう続けられました。

『そなたたちが平穩無事に暮らすためには、何と言っても目立たぬのが一番だ。なのに、そんなそなたたちに、立場上どうしても周囲の注目を集めてしまいがちな私がこれ以上深く関わっては、本末転倒になるのではないかと思つてな。』

だが、それを口にすれば、そなたの父上は恐らくこの縁談そのものを白紙に戻してしまつていたろう。ユアンにそんな妙な気を回させてまでく幸せゝになどなりたくはない、とか何とか言つて……

それは私の本意ではなかったから、これまでずっと、だんまりを決め込んでいたのだよ』と――

呆然と竜神王は息子を見つめた。

何ということだろう。ユアン＝ナスルがそのような思いを胸中に秘めていたとは……すべては、この自分と自分の妻子の平穩無事を願つてのことであつたとは……！

「おまえ、何故それを」

もっと早くに知らせなんだのだ、と言いかけて、しかし彼は苦笑した。

「わしが『言わせなかった』のだったな」

あのと看、妻は確實に、自分に何かを訴えようとしていた。それなのに、聞く耳持たずにさっさと天界へ戻ってしまったのだから。しかも、戻ってからは戻ってからで、やらねばならぬことが山のようにあった。長き不在のために途切れてしまっていた人脈を再構築し、さらに政の現状についてもあらためて学び直し……

それに、何よりも、嫌な記憶は一刻も早く忘れ去ってしまいたかった。だから、息子が何度となくまとわりついてきて何事か言おうとしていたのに気づいていながら、あえてそれを無視していたのだ。

『うるさい！ あちらで遊んでおれ！』

ぴしゃりとそう言い放って……

「そうか……それでおまえは、わしの意向にあんなにも頑迷に逆らい、瀕死の重傷を押してまで人界へと下ったのだな。伝えることがかなわなかった分、せめてわしとユアンとが剣を交えることだけは何とかして阻みたい、と……」

「はい」

即座にティエンは首肯した。それから……一瞬だけ視線を宙に彷徨わせ、付け加えた。

「それも、理由のひとつでした」

「ひとつ……？」

竜神王は、眉をひそめた。

「どういふことなのだ。ほかの理由とは、いったい……」

すると、ティエンはうつむいた。さらに逡巡するような表情を見せたのち、彼は低く呟いた。

「責任が、ありましたから」

「責任？」

「はい」

ティエンは、着ていた王族服の裾を、ぎゅっと握り締めた。ゆっくりと焰色の双眸が上がる。大きく数回肩で息をつく、彼は声を絞り出した。

「私、だったのです——あるとき、森に付け火をしたのは」

「本当に、浅はかでした」

透き通る白い横顔に苦悶を浮かべて、ティエンは自嘲的に吐き捨てた。

「あるとき、退屈に任せて森の端の方まで散歩に行ったことがありました。そこからは海が見え、砂浜では自分と同じ年頃の子どもたちが群れて遊んでいた。その様子は、とても楽しそうで……自分もそこに混じりたいと痛切に思いました。」

でも、家に帰ってそのことを母上に話したら、怖い顔をされて、『あなたは絶対に森から出てはいけないのよ』と叱られた——今なら無論、母上の気持ちもよくわかります。あの子どもたちに比べて、私はあまりにも異質だった。たとえ遊びたいと声をかけても、その中に混じれるはずもなかったでしょうし、そのことが子どもたちの口から大人へと伝わりでもしたら、きつとさらに大変なことにもなつたでしょう。

しかし、当時の私には、そんなことなど理解できなかった。そして、短絡的に思ってしまったのです。この森があるからいけない。森さえなくなれば、自分もあの子らと同じように『自由』になれるのに違いない、と……」

「何と……」

さらに衝撃を受けて、竜神王は絶句した。脳裏に、天界に連れ帰る直前の息子の怯え切った表情が甦る。あるとき彼がぶるぶると震えていたのは、付け火をした罪悪感ゆえだったのだ。父親がいきなり恐ろしい形相で現れたのも、自分を叱責するためだと思ったのか

もしれない。

（わしは本当に何もわかっていなかったのだな……）

そのことだけではない。そもそも、まだ十にもならない幼さだったティエンが、付け火などという恐ろしい行為に走ろうとするほど思い詰めていたこと——それほどまでに「淋しかった」のだということも、まるでわかっていなかった。もし、ほんの少しでもそうしたことに気づけていたなら……

「すまぬことをしたな……」

我知らず、その言葉が口をついて出ていた。だが、白竜は激しくかぶりを振った。

「何をおっしゃいます父上！」

悪いのはすべて私なのです。私があんな短慮をしなかったら、父上も母上も、きっと今でもここ人界にあって仲睦まじく……ひいてはユアンおじ様にも、あのようなご迷惑をかけずとも済んだはずだったのですから。それに……」

その視線が、いまだ地に横たわっているユアン「カイ」に向いた。呼吸こそだいぶ穏やかになってきたものの、相変わらず目は閉じたままだった。そんな彼を、クウが甲斐甲斐しく介抱している。地べたにそのまま寝かせておくよりは、ということなのだろう、壊れた家の中から粗末な布団と竹で編んだ枕を探し出してきて、そこに相手を寝かせ直してやつたり、額に浮いた汗をそっと拭ってやつたり——王族の頭は神聖なものとされており、庶民がみだりに触れることは禁じられていたから、手ぬぐいを幾重にも重ねて、直接手で触れないよう細心の注意を払いつつ。

そのさまを見て一瞬だけ微笑むと、ティエンは父に視線を戻した。

「カイは、ずっと悩み苦しんでいたのです。自分は誰からも誕生を望まれていなかった。自分は『穢れた子』なのだ——それは、氣鬱の病の進んだ母上が『別れた子』の名を呼びつつ王宮内を彷徨い、拳句にカイを腹に入れたまま御自害なされたからでした。

そのことをカイ本人から聞いた当初は、記憶が戻っていなかったこともあり、何という酷な話よという気持ちしか抱かなかったのですが、今思えば、その『別れた子』とはほかでもない私のこと。つまり——」

声が詰まり、がっくりと彼はうなだれた。

「父上のおっしゃった通りです。私はカイにとって『友』などではない。むしろ、憎むべき『宿敵』も同然だった——だってそうでしょう？ 母上は、カイを懷妊してなお、私のことしか眼中になかった。おまけに、そんな母上に、カイは危うく殺されかけました……カイの立場に立てば、これほど哀しく悔しいことはないではありませんか。

ですから、そのことについても私は『責任』を取らねばなりません。本当は、父上と刺し違えることでこの二つの責任が同時に果たせるかと目論んでいたのですが……でもまあ、これでもいいかな。理由はどうあれ、父上を道連れにすることに若干気が咎めていたこともまた事実ではありましたしね」

「ティエン……？」

はっと竜神王は息子を見直した。その声に目を上げたクウも、ぎよつとした顔になる——いつの間にか、ティエンの手にはユアン」

カイの短刀が握られていた。

「カイには、私が旅に出たとしても伝えておいて下さい。そうしないと、きつとまた要らないことで苦しむだろうから」

かすかな笑みを浮かべると、ティエンはその翼をバサリと広げた。金色の二本角がピカリと光る。去っていたはずの雷鳴が、再び小さく聞こえ始めた。

「待て！」

とつさに竜神王は、息子の袖を捉えていた。

「待つのだ、ティエン……！」

今にも飛び立とうとしていたティエンの動きが、ピタリと止まった。いささか驚いたのだ。相手が、明らかに取り乱していたから——息子の前でさえ決して王者としての威厳を崩さず、国益のためとあらば、その命を絶てと命ずることすら辞さなかった、この男が。もしかすると、友に裏切られていなかったことを知って、頑なに閉じていた心に何らかの変化が生じたのだろうか……

「早まったことをするでない、ティエン！」

袖をつかんだ手に力をこめて、竜神王はもう一度息子の名を繰り返した。

「もはや、おまえは十分に罰を受けた。今日までの長きにわたってこんにちずっと罪の意識を背負い、たったひとりで苦しみ続けた——それは、

もしかすると、あの場ですぐに死罪となってしまうより、よほど酷な刑罰だったかもしれないと思うぞ。

だいたい、今さらおまえが自害したところで誰が喜ぶと思っているのだ！ 特につい先刻、自らの命を賭してまでおまえを救おうとした『中の国王』の心情はどうなる！」

「なればこそ、です」

ティエンは、しかしきっぱりと首を横に振った。

「カイの気持ちは重々承知しています。このうえなくありがたい、もったいないとすら思っている——だからこそ、すべてを思い出し、てしまった今、この先も彼に対して平然と『友』だと名乗り、以前と同じ暮らしを続けることなど私にはできぬのです。そのようなこと、私自身の良心が許さぬのです！」

後生ですから父上、その御手をお放し下さい。もしも私に父親としての情けをかけるおつもりが少しでもあるのなら、どうか私に、この手で自らを断罪することをお許し——」

いきなり語尾が途切れたのと、「いでっ！」という場違いすぎる悲鳴が響いたのと、「ぼんっ」という音と共にその姿が霧散したのとが、ほぼ同時だった。いささかあつけに取られた竜神王の足元にどさり、と白くとぐろを巻いた何かが落ちた。

「~~~~~！」

声にならない声で呻くと、ティエンは金の角の片方をくしくしとさすった。その傍らに、小さな石つぶてが転がっている——これで角を一撃され、その拍子に竜体となってしまったのだ。短刀も地面に放り出されてしまっており、しかも、仮に持ち直したところで、竜の短い前足では、鞘から抜くことからしてかなり難しい。まして

や自害など……直前までが悲壮感たっぷりだっただけに、余計に情けなさ満載の光景である。

自分でもそれは自覚できたのだろう、ティエンは、きゅうーっと悔しげに一鳴きした。そして、急いで再び人の姿になるうとしたのだが、残念ながらそれもかなわなかった——まるで猫かうサギの仔を捕まえるかの如くキュツと首筋をつかまれ、身動きできなくなっていたのだ。

「何を似合わぬことをごちゃごちゃ抜かしておるのだ、貴様は！」

自らの鼻先に竜をぶら下げると、怒ったようにユアン＝カイは言った。

「だいたい貴様、ここをどこだと思っている！ 私をいつたい誰だと……？ 私の許しも得ずに、勝手に妙な方向に話を進めて良いと思っているのか！」

ティエンの赤い目が、まん丸に見開かれた。短い手足をばたばたさせ、きゅうきゅうと反駁するように鳴く——その声が、不意に呑み込まれるように止んだ。

「仔細は、夢うつつに聞いた」

ぎゅつ、と竜を抱きしめて、ユアン＝カイは呟いた。

「だがな、私は、たとえそうだとしても一向に構わぬ。むしろ、嬉しいくらいだ。

知つての通り、これまでずっと家族の縁には薄かったからな。そんな自分に、もう一人家族がいたのだと……しかもそれが、ほかで

もないおまえだとわかったのだ。喜ばないはずがなかるう？

まあ、おまえの方が兄だということにはいささか納得が行かんが、それにも目をつぶろう。とにかく、とにかくだな、おまえがいないと、私は――」

そこで一旦言葉を切ると、彼は、ちよいと竜の額をつついた。

「おまえに政務を任せて、団子を食いに來ることもできんではないか」

一気に呆れ顔になって、ティエンは、がぶりと相手の指に噛みついた。

(……いない！)

翌日の夕刻。ユアンⅡカイは、若干青ざめた顔で足早に王宮内を巡っていた。

(どこだ……どこに行った……？)

あのあと間もなく、竜神王は再び竜体に戻り、天界へと帰って行った。

『言っておくが、今回矛を収めたのはあくまでもわし自身の非に気づいたからなのにすぎんぞ。思えば、わしはそなたの父に対して「正々堂々と」と言ったのであった——にもかかわらず、今回のやり口は少々その範疇から外れておったからな。』

しかし、だからと言って「竜神族の大義」まで失われたわけではない。今後、うぬら人族が我らの領域を少しでも侵すことあらば、いつでも大軍を率いて攻め下ってやるからそのつもりでおれ。

それからティエン、おまえには、火付け及び人族への寝返りの罪にて王族籍の剥奪と今後一切の天界への出入りの禁止を申し渡す。今より、我らは親でもなければ子でもない。勝手にどこへなりと行って好きなようにせい！』

そう言い置いて……

つまり、すべては元の鞘に収まったはずだった。

住み家を失ってしまったクウにあれこれと面倒をかけた詫びも含めて当面の宿を確保してやり、いずれ家も建て直すことを確約した

のち、ユアン・カイと白竜ティエンは王宮に戻ってきた。既に空も白みかけようかという時刻だったので、そのまますぐに二人はそれぞれの寢床に潜り込み、泥のように眠りこけた。朝になり、例によって例の如く随臣たちに叩き起こされ、沐浴の湯に突っ込まれ、冷え切った朝餉を食わされたユアン・カイが、熱い湯を浴びてもなお抜け切らない睡魔と闘いつつ執務室に向かったときも、ティエンはまだ自分の寢床である竹で編んだ大きな籠の中にいて、片目だけを開け、包帯を巻いた尻尾を面倒くさげにはたはたと振って彼を送り出した——何もかも、昨夜のことなどなかったかのように「いつも通り」だったのだ。

……それなのに。つい先刻、執務を一通り終えたユアン・カイが自室に戻ってきたとき、ティエンの気配は部屋の中のどこにもなかった。

無論、彼とて日がなそこにじっとしているわけではなく、退屈になれば姿を消してあちこちへ出歩くこともあるのだと承知はしていた。現に、つい昨日だって、そうやって弱冠五歳の上つ国の一の姫・ユイファの尻に敷かれている自分の姿をこっそりと覗き見て、さんざん面白がっていたのだ。

けれど、昨夜の今日である。嫌な胸騒ぎが沸き起こってくるのを、どうしても抑えることができなかった。もしかして、一旦素直にここへ戻ってきたのは、あくまでも自分を安心させるためなのにすぎなかったのではないか？　そうして、あらためてひとりになったとき、やはり心苦しさに耐え切れなくなつて……

（こんなことなら、もっときちんと伝えておくのだった……）

今さらのように、後悔が胸中を去来する。

『おまえがいないと、私は——』

そのあとに、どうしてあんなおちゃらけたことを言ってしまったのだろう。

『おまえがいないと、私はまたひとりぼっちになってしまうではないか。そんな思いをするのはもう嫌だ。頼む、私を置いて逝ったりなどしないでくれ……！』

どうして、はつきりとそう言わなかったのだろう……！

「……陛下」

だしぬけに、後ろから呼び止められた。振り返ったユアン・カイは、思わず渋面になって頭を掻いた。小花が刺繍された薄桃色の衣服をまとい、胸元にくまのぬいぐるみを抱きしめたユイファ姫が、彼女自身の居室の扉から小さな顔を覗かせている。そういえば、テイエンを探すのに夢中になるあまり、この小さな貴婦人への「ご機嫌伺い」のことをきれいさっぱり失念していた……

「申し訳ない、姫。今日はちと所用があつて……」

すると、思いがけない答えが返ってきた。

「わかっています。尋ね人がいるのでしょうか？」

ぬいぐるみの背を撫でながら、ユイファはにっこりと微笑んだ。

「でしたら、書庫を——『竜の君』はたぶんそこにいらっしやるから」

穴が開くほど、ユアン「カイは許婚いいなすけの顔を見つめていた。

「……姫。少し私の部屋で話をしないか」

本当は、この場ですぐに問い質したいところだった。「竜の君」というのはあのティエンのことなのか。もしそうだとすれば、どうしてユイファには彼の姿が見えたのか。何故今現在の彼の居場所までもがわかるのか――

だが、廊下には常に誰かしらが行き来しているし、姫の部屋にも上つ国から連れてきたお付きの女官が四六時中控えていた。もし彼らに話を聞かれて妙な騒ぎにでもなったら、いよいよティエンはここにいらなくなる。

となれば、自分の一声でいくらでも人払いの可能な自室に彼女を連れて行って、仔細を聞くのが一番……そう考えつつ歩を進めていたユアン〓カイは、ふと、相手がついて来る気配がないのを感じた。

（しまった……）

再び彼は顔をしかめた。いくら婚約している関係だとはいえ、相手はまだ七つの祝いも済まさぬ幼子なのだ。既に成人しているユアン〓カイに比べたら、当然歩幅も狭ければ歩く速度も遅い。それなのに、そのことに対する配慮が全く行き届いていなかった……

しかも、相手を振り返ったとき、ユアン〓カイは、原因はもうひとつあったのだということに気づいた。

廊下の壁に右手を添えて、ゆっくりゆっくりと姫は歩いていった。その足は、まるで床を探っているかのようなそろそろとした動きをしており、黒く大きな瞳は、どこことなく不自然な方を向いている。それを、しばしユアン〓カイは眺めた。それから、おもむろに元来た道を引き返した。

「すまん、歩くのが速すぎたな」

とだけ言って、姫を抱き上げる。一瞬、彼女はビクリと身をすくめたが、すぐに、ひしつとユアン＝カイの首にしがみついた。

自室に戻ると、こちらからまだ何も言わぬのに、警備の兵はササツと姿を消した。そのやけに心得た顔に、この分では陰で何を言われるかわからんなといささかげんなりもしたが、この際しかたがない。

自分の座布団に姫を座らせると、ユアン＝カイはその向かいに腰を下ろし、あらためて彼女を見つめた。

抱きしめたままのぬいぐるみに視線を落として、彼女はうつむいていた。その様子に付随して、ほかの記憶も甦ってくる——例えば、彼女の部屋を訪たび、彼女はいつもこうして目を伏せ、決してユアン＝カイを見ようとはしなかった。ままごと遊びをしているときでさえその調子で、おまけに、道具ひとつ取るのにも女官たちいちいち命じて持って来させるのである。さすが大国の一の姫、随分とわがまま不遜にお育ちになられたものだ。ユアン＝カイは少々冷ややかにそれを眺めていたのであったが……

「そなた……目に障りさわがあつたのだな」

まっすぐにこちらを見なかったのは、そうしないと視線が微妙にずれてしまうことを気取られてしまうからだだったのだ。女官らが唯々諾々と姫の指示に従っていたのも、姫に道具を取らせれば、先ほどの廊下でのさまのように手であちこちを探ることになり、結果として彼女の視力に問題があることを悟られてしまうから……

そのどちらも、恐らくは姫の父親から指示された行動だったのだろう。上つ国にとって、この件は最大の禁忌事項に違いなかったか

ら——ただでさえ年齢にかなりの開きがあるうえに、体に障りまである姫を結婚相手として送ってきた。このことが公になれば、中つ国側で元々くすぶっていた「反・上つ国」の感情に一気に火がつくは必定。場合によっては開戦ということにすらなるかもしれない。

ユアン「カイが廊下でこのことを確かめるのを避けたのも、実はそれが理由であった。別に上つ国の肩を持つわけではないが、かと言って、無用な争いの火種を自らの手でわざわざまく必要もないだろう。

実際、こういった諸々のことについては、姫も重々言い含められていたと見えた。顔色が、たちまちすうつと青ざめる。どうしよう、自分はまずいことをしてしまったのだ——明らかにそう読み取れる表情を浮かべると、消え入るような声で彼女は言った。

「わたくしは……実家（さと）に帰されてしまうのでしょうか」

「何……？」

いささか意表を突かれて、ユアン「カイは相手を凝視した。

帰されて「しまう」——その言い方は、上つ国に帰されるのは彼女の本意ではないのだということを物語っていた。こんな小さな子どもであれば、本来ならそれを喜ぶはずなのに……ユアン「カイとてそうであった。下つ国にあった頃、何度願ったことだろう。「今すぐ中つ国へ帰れ」と言われたら……そうして、まだ見ぬ父や母や兄たちとまみえることができたらどれほど良いか、と。それなのに、この姫はそれを望んでいないという。それは、つまり……

ゾクリ、と寒気を感じて、ユアン「カイは身震いした。障りがあるって出戻ったとなれば、今後彼女を「政略結婚の道具」として他国に送ることはできなくなる——先方から言下に断られるだろうことは必至だからだ。そして、「道具」としての価値を失った彼女がたどる道は、その後一生王宮に幽閉状態となるか、もしくは……

（させぬぞ、そんなことなど！）

ほとんど反射的に、そんな思いが閃いていた。

「大丈夫だ。このことは誰にも漏らさぬ。たとえ誰かが知ったとしても、何も心配はない。この手で、必ずそなたのことは守ってやるから——だから、もうそんな顔はするな。安心して、ここに居って良いのだぞ」

自分と同じように、ユイファもまた、「手駒」として異国に送られた悲哀を胸に闘っていた。ましてや、彼女は自分よりずっと過酷なさだめをも背負っていたのだ。少なくとも「真実」を知るまでの間は、いずれ家族と邂逅できる日が来るのだということを一縷の希望とできていた自分に比べて、彼女には、それを願うことさえできない——家族と再会する日は、すなわち自らの命運が最悪の方向で決ってしまう日でもあるのだから。そのつらさ、その悲しさは、自分のそれなど及びもつかないものであつたろう。

それなのに、自分はそこまで思い至ることができなかった。それどころか、そんな彼女との関係を、単なる「義務」として内心疎んじてさえいた……

（だが、もうそのようなことはしない！）

このように、色を失い怯えた顔などもう二度とさせはしない。そして、無論彼女の実の家族には遠く及ばないだろうが、少しでもその穴を埋められるような存在となってやらねば——かつて、ティエンが自分にそうしてくれたように。

「陛下……」

ぱあつと花が咲いたように、姫は再びにっこりした。

「良かった……」

あのね、わたくし、決して見えないわけではないの。そこに陛下が座ってらっしゃるのだって、ぼんやりとだけど、ちゃんとかかるんだから。それに、こうして目を閉じると、心の中に『絵』が浮かぶの。その『絵』を見ればどこに何があるのかってことも全部わかるから、全然不便なんかないのよ。

『竜の君』のこともね、そうしているときに『見つけた』の。体じゅう真っ白で、きれいな真っ赤な目をしてて、頭には金色のきらきらした角が生えていて、透けるような翼でゆっくりと飛んでいて……

とっても素敵だったから、本当は声をかけてお友達になりたいなあと思ってたぐらいだったのよ。だけど、陛下のお部屋に向かって飛んで行ったら、あきらめることにしたの。だって、わたくしも、このくまちゃんが一番のお友達で、この子を取られたら嫌なものですもの。きっと陛下もそうなのではないかしらって思ってた

「そうか……なるほどな」

にわかには信じ難い話ではあるが、さりとてでたらめであるとも思えなかった。姫が描写した「竜の君」の姿は、ティエンのそれとぴたりと一致していたから。それに、物の本で読んだ話ではあるが、人にはひとつの能力が欠けると、それを補うべくほかの能力が人並み以上に発達する、ということがあるらしい。とすると、姫の場合は、欠けた視力を補うため、武術で相手の動きを見切るときに使う「心眼」のようなものが発達した、ということなのかもしれない。

「では、あれが書庫にいるとわかったのも、その『絵』とやらを見たからなのだな」

「はい！」

大きく姫はうなずいた。

「本当はね、絶対信じてなんかもらえない、それどころか、頭がおかしいと思われて実家^{さとし}に帰されてしまうかもしれないから、そんなことは決して言っではいけませんって、父上からも母上からも言われていたの。」

でも、陛下のご様子が、わたくしがこのくまちゃんをどこかへやつてしまって困っていたときと何となく似ていたものだから……だから、きつと教えて差し上げたら喜んでいただけるとは思わないかと思っ

ねえ陛下、わたくし、役に立つでしょう？ おそばに置いておいて損はないでしょう……？」

またしても愕然と、ユアン「カイは姫を見つめた。「役に立つ」「損はない」——とても年端の行かぬ子の口にする言葉とは思えなかった。それほどまでに、彼女は必死なのだ。たとえ、口先でどれほど「安心しろ」と言われても、不安で不安でたまらないのだ……そんな彼女にどのように答えたものか、ユアン「カイはひとしきり迷った。ややあつて、彼はくしゃりと相手の頭を撫で、再びその体を抱き上げて膝の上に乗せた。

「そうだな。そなたのおかげで本当に助かった。そなたのような者を妃とできるとは、私は三国一の幸せ者だな。今後とも末永くよろしく頼むぞ」

優しく語りかけると、その体をぎゅっと抱きしめてやる——異国

の地にあつたときの幼い自分が、不安や淋しさに駆られたとき、密かにそれを願ったことを思い出して。

姫の瞳が、まん丸になった。その表情が、次の瞬間さらにぱあつと華やいだ。

「……はい！」

それから十年ほどのち、ユイファ姫は、正式に中つ国国王妃となり、その「心眼」の力を遺憾なく発揮して、陰に日に夫を助けた。この付近一帯を未曾有の天変地異が襲ったときには、その気配をいち早く予測して対策を奏上し、上下両国とその後も何度か交えた戦の際には、敵方の動きを手取るように描写して夫の作戦立案に大いに貢献し――

そういつた様々な功績ゆえに、彼女は後世の歴史家から「救国の母」と称されることになるのだが……それはまた別の話である。

「……うーん」

一声唸ると、ティエンはがつくりと肩を落とした。いつ誰が入ってきてもいいように、今は人に変化^{へんげ}している。基本は彼自身の人型のときの姿なのだが、髪と目だけはさすがに同じというわけには行かないので、この国のほかの人間と同様に黒く見せていた。

「やつぱ、こういうところにはしまわれてねえのかなあ……悪かったな、結局一日付き合わせちゃって」
「いいよ、そんなこと」

鷹揚に答えたのはクウであった。

もっとも、今の彼女をユアン・カイが見たら、きっと別人だと勘違いすることだろう。ボサボサだった髪の毛はきれいに櫛で整えられ、顔にはほんのりと薄化粧。身につけている鷲色の衣服も、いつものごわごわした麻のそれではなく、女官たちが着ているような柔らかい絹でできていた。

『万が一誰かに見つかつてみる。見つかっただけでも十分大問題なのに、それが町娘だった、なんてことになったら余計に騒ぎになるだろ』

そう言って、ここに来る前にティエンがあつらえてくれたのであった。せめて女官のような格好をしていれば、王に命じられて書庫の整理に来たとか何とか言ってごまかすことも可能だろうというのである。

「つていうか、こつちが礼を言いたいくらいだよ。こんなきれいな衣服べべ着せてもらって、おまけにお城に連れて来てまでもらって——そうじゃなくなたって、ミマイなんとかとか言って随分な大金も貰ってるってのにさ」

「ミマイなんとか」とは、昨夜の別れ際にユアン・カイが手渡した「宿代兼見舞金」のことであつた。その額は、国王にとつては微々たるものだったかもしれないが、クウのような一般庶民にしてみれば一年は遊んで暮らせるほどのものだった。

と言つても、本当に遊んで暮らすつもりはもちろん全然なかつたのだが——ユアン・カイは、恐らく自分に足を洗わせるつもりでこの金子きんすを渡したのだろうと彼女は分析していた。実際、これを元手にすれば、いくらでもまっとうな商売を始められる。地主からあの土地を買い取つて、畑を再開するといふのも悪くはないかもしれない。

「それに、あたしはあんたのその心意気が気に入つたんだよ。カイのために、こつちやつて家捜し——つていうの？ そんなことまでしようだなんてさ。ほんと、いい兄ちゃんだよあんたは」
「……そいつはどうか」

ティエンは、しかし皮肉交じりの口調で否定した。

「ほんとにはカイのためなんかじゃねえのかもしれない。俺は、ただ……そうだな、自己満足してえだけなのかもな」

「ジコマンゾク？」
「そ」

肩をすくめると、彼は、ひょいと手近の窓枠に腰掛けた。

彼らが探していたのは、前国王ユアンⅡナスルの日記もしくは書簡だった。

ティエンには、いくら友人の子とはいえ、竜神族と人族の混血児である自分にまるで我が子のように接してくれた前国王が、いくら妾腹の子とはいえ、我が子には違いないユアンⅡカイの誕生を忌み嫌っていたとは到底思えなかったのだ。だいたい、望んでいない子に自分の名前の一節をそっくりそのまま与えたりするものだろうか？　きつと、何か余人にはわからぬ仔細があるのに違いない。

『あの方の書いた日記なり書簡なりが見つければ、そのあたりのこともはつきりとするはずなんだ。だから、どうしても探し出してやりてえ——けど、書庫の書物ってかなりたくさんあるから、俺一人じゃ確かめ切れねえんだよな。で、おまえに手伝ってもらえたらなっと思つたわけ。どう？　礼ははずむぜ』

昼前、突然宿屋に現れたティエンは、面食らっているクウに向かってそう語った——

「もしカイが両親に望まれて生まれてきたんだってわかれば、俺の負い目も少しは消える。本当のとは、それが望みなのかもしれねえな、俺は」

東の空から上ってきた満月に視線を当てて、ティエンは小さくため息をついた。一度目を閉じ、それから、気持ちを切り替えようとするかのようにパツとその目を開いて、ひよいと窓枠から飛び降りる。

「ま、ともかく、じきに夜になっちまうし、そろそろ送ってやるよ。」

そうそう、約束の礼を払わねえとな。カイの野郎に比べたら微々たるもんだが、気軽に使いやすいのはやっぱり小銭だろ。こいつでうめえ晩飯の一つでも食いな」

言いながら、懷から絞り染めの巾着を引っ張り出して、銅貨を何枚かクウの手に握らせた。

「何だよ、鳩が豆鉄砲食らったみてえな顔しやがって。竜が金を持つてんのがそんなに意外かい」

「そういうわけじゃないけど……さっきだって、べべ買ってもらったわけだしさ」

苦笑して、クウは首を振った。

「でも、それだって、とどのつまりはカイからもらった小づかい銭なんじゃないのかい？　だったら、これ以上何かしてもらっちゃまう

つてのは……」

竜神王の話やユアン・カイの様子から推して、ティエンはこの十年間、ほとんどの時間を竜体で過ごしていたようだ。そんな彼が、自ら金を稼いで所持しているとは少々考えにくかったのである。

ところが、それを聞いて、ティエンはみるみる口をとがらせた。

「ちえっ、馬鹿にすんなよ。」

こう見えても俺、一応オトコザカリなオトシゴロなんだぜ？ 体だつてバリバリ健康だしよ。だから、たまにや羽目外して遊びてえときもあるし、そういうことに使う金ぐれえは、人に変化^{へんげ}して自分できつちり稼いでんだよ。んなもん、いちいちカイに出してもらつてたらみつともねえだろ」

「ふうん……」

目を丸くして、クウは相手を見直した。その柳眉が、ふとひそめられる。あらためてまじまじと相手を見たことで、記憶の一部が刺激されたのだ——ありていに言えば、その顔に極めてよく似た似顔絵を、どこか全く別の場所で見たような気がしたのである。

しばし彼女は考え込んだ。そして、パチンと指を鳴らした。

「そうだ！ ひよつとして、あんたつてあの『極楽鳥』の」

「だあーつたつたつたつ！」

ティエンの顔色が面白いように一変した。どうやら、見事「大当たり」を引き当てたものらしい。

「そつ、そういうことをでけえ声でしゃべんじゃねえよおめえは！ つつーか、何でおめえがんなこと知つてんだよつ？」

「だって、『商売』で花街にも結構出入りしてたもん。あすこつて

金回りのいい奴がうようよしてるからさあ」

平然とクウは切り返した。

「ああ、そうだ！ あたし、こういうベベがもうひとつほしいなあ。えっとお……源氏名は、確か、ツクヨミさん、だったっけか？」

「~~~~っっ！」

がしがしがしや、と髪を掻きむしると、ティエンは再び巾着を開いた。

「あのね。一応断つとくけど、俺の場合、あくまでも『職場がああいう場所』なだけであって、客に酒出したり話聞いてやつたりはするけど、いわゆるいかがわしいことって奴は一切してないのよ？」

「っつーか、できねえし——だって、石ぶつけられただけで竜になっちまうんだぜ？　まして、あの手のコトの最中なんつったら、何が起こるか……って、こんなガキ相手に何つらつら『釈明』してんだ俺」

一気にげんなりして、ティエンはまたしてもがっくりと肩を落とした。

「んでもって、おめえも目えキラキラさせて聴き入ってんじゃねえよ！　そんなふうに『期待』したって何にも出てこねえんだからっ」「いいもん、そうやっておたおたしてるあんた見てるだけで十分面白し」

にんまりと、クウは相手を覗き込んだ。

「それに、『一応断つとくけど』あたしはガキなんかじゃないよ。『こう見えても』じきに二十歳はたちになるんだからね」
「……ほーお」

一瞬真顔になって、ティエンは瞠目した。あらためて相手を頭のとっぺんからつま先まで観察して一言、

「けっ」

「どつという意味だよそりゃあー！」

目にも留まらぬ速さで（何しろ商売柄こういうことは得意中の得意だ）、クウは相手の髪の毛を引っつかんだ。もちろん、意図してそうしたのである。次の瞬間、ぽんっ、という音と共にティエンは竜に变じ、クウに片方の角をむんずと握られた格好でじたばたしていた。どうやら角は「急所」でもあるらしく、振りほどこうにも振りほどけない様子だ。

「なっ、何しやがんだっつ！」

即座に抗議はしたものの、その声はクウの頭の中にしか届かないので、傍目にはきゅーきゅー言って短い手足をバタバタさせているようにしか見えない。何とも締まらない図である。

「ふん、ひとを小馬鹿にした報いだよ！」

勝ち誇ったようにクウは肩をそびやかした。

「ナンだったら、カイの部屋まで出かけてって今の話洗いざらい聞かせちゃおっかなあ？」

「あ、それだけはやめて」

きゅうん、と一声懇願すると、ティエンはふるふる首を振った。あっちこっちと体を振ってようやくクウの「魔手」から逃れ、ぽんっ、と人の姿に戻る。顔をしかめて角のあったあたりをくしくしとこすりつつ、

「ほんと、マジでそれだけは勘弁な。」

いや、百歩譲って知られること自体はまあいいのよ。さっきも言ったけど、別に後ろ暗いことをやってるってわけじゃねえからさ。

ただ、あいつ、あの通りの性格だから、『そんなに小遣いがほしかったのか。気づかなくて済まなかった』とか何とか言って、金貨山積みにしそうじゃねえか。何も俺は、そういうことを望んでるわけじゃねえから……」

「なるほどね、そりゃそうだ」

納得した顔になって、クウはふき出した。

「じゃあ、その代わりに、何だってそんな商売するようになったか聞かせてよ。」

だって、今のあんたの暮らしぶり見たら、差し迫って大金が要るって感じじゃないもの。食うことにも寝る場所にも不自由してるわけじゃない。ただ小遣い銭が稼ぎたいだけなんだろう？ だったら、ほかにいくらでもやりようがあるじゃないか」

「まあなあ……」

ポリポリ、とティエンは頬を搔いた。

「実際、おっしゃる通りなんだ。なんだけど……行きがかり上やむを得ず、っていうかな」

「イキガカリ何だって？」

「つまり、最初っからそのつもりだったわけじゃねえってこと」

説明し直すと、彼は記憶をたどる目になった。

「あれは、カイと一緒にこの国に戻ってきて半年ぐらい経った頃だったかな。」

あいつは国王としては全くのペーペーで、今以上にいろんなことに振り回されて忙しかった。だから、当然俺のことなんかに関心する余裕はねえし、それどころかすっげえピリピリしてて……しかも、そのピリピリが日増しに強くなって、しまいには同じ部屋の中にいることさえ憚られる、みてえな雰囲気になっちまってさ。たぶん、最初のうちはただ夢中で仕事してたのが、だんだんその難しさとか責任の重さとかがわかってきて、そいつに押しつぶされそうになってたんだろうな。

そんなこんなで、ここはどっかへ行つた方がいいかなって気がひしひしとしたもんで、城下へ出かけることにしたんだ。ところが、来たばっかだから不案内じゃねえか。んでもって、気づいたら花街に迷い込んで——何だよその目は！ほんとに知らねえで迷い込んだんだってばっ！」

「はいはい」

クウは肩をすくめた。

「だけど、せつかくたどり着いたんだからちよこつと楽しんで帰ろうか、ぐらいのことは思ったんだろ？」

「とりあえずぐるっと一回りして帰ろうって思っただけ！」

眉をひそめてティエンは言い直した。

「そりゃあ、男として興味が沸かなかったつつたら嘘にはなるけど、それこそ金なんか一銭も持っていなかったしさ。」

だから、どこに入るでもなく、店の看板眺めたり、客引きのねえちゃん適当にあしらったりしながらぶらぶら歩いてたわけなの。で、『極楽鳥』の前まで来たときに、いきなり声をかけられて」

「もしかして店の人に？」

「ケバいババアにだよ！」

再び眉をしかめて、ティエンは訂正した。

「そのババア、俺を店の人間だと勘違いしたみたいでさ。勝手にひとの腕引つ張って店に入って行きやがって……おまけに、それから朝まで、延々と、あーだこーだってぐだぐだと話聞かされてよ。ほんっと、えっらい目に遭ったわ。」

ところが、このババアが、実はどっかの大貴族の大奥様だったらしくてな。店を出るときに、目ん玉飛び出るほどの大金を『落とし』ったんだ。そしたら、店の奥から店主がすっ飛んできて、『あんな上客をつかまえられるのは一種の才能だ。ぜひウチで働いてくれ』って……

もちろん断ったんだよ？ まあ、真っ正直にほんとのこと言うわけにも行かねえから、『実は自分は皮膚の病を患っていて、脱いだらそりゃあ悲惨な有様なんです』って……『証拠』として、ちらつと袖めくって、ウロコ見せたりなんかもしてな。

だけど、『それでもいい』って譲らねえんだ。『店の中に座ってるだけでもいいから』って……ま、要は客寄せの珍獣扱いってところかな」

実際「珍獣」なんだから致し方ねえけどよ、と自分で卑下して苦笑いする。その表情が、ふと剣呑な色を帯びた。クウは怪訝に首をかしげた。

「何？ どうしたのさ」

「……いや」

とだけ答えて、ティエンは腕を組んだ。そのまま何事か考え込む。

（「珍獣」なんて言ったもんだから、何か嫌なことでも思い出しちまったのかねえ……）

何となくクウはそう思い、そっと相手から視線を外して窓の外を見やった。

そこからは、城下の様子が一望できた。暮れなずむ街は葡萄色に染まり、上空では、さっきよりさらに高くなった満月が煌々と光を放っていた。

ユイファ姫を抱いたまま、ユアン「カイは書庫を歩き回っていた。いくつもの書架の傍を通り抜けて、ユイファが『竜の君』はこちらよ」と言った場所まで行き……行ったことをいささか後悔した。

そこにいたのは、髪と目こそ黒いものの、確かに人の姿をしたテイエンであった。が、書架にもたれたその横顔はそこはかとない憂いを含んでいた——ちょうど、ユアン「カイの短刀を片手に「自らを断罪する」と言い放ったあのときのように。そして、傍らには、そんな彼を気づかわしげに見つめる一人の女官の姿……これは、もしかするとえらく間の悪い場面に来合わせてしまったのではあるまいか？

（というか、そもそもテイエンの奴いつの間に女官とこのような関係に……）

まあ、彼は自分より十近くも年上らしいし、自分よりはるかに世慣れているようでもあるから、惚れたはれたのひとつやふたつぐらいあるだろうと理屈では理解できるのだが……何分、普段の竜体の印象が強すぎて、感覚的に全く受け入れられない。

しかも、さらに困ったことに、どうしたら良いのかもさっぱり見当がつかなかった。私人としては無論「邪魔をしないようにそつとこの場を去る」のが妥当な行動なのだろうが、国王としては果たして看過して良いものなのだろうか？ 女官も王宮で働く者であるから、総責任者は国王だということになる。その国王が、一応「風紀の乱れ」の範疇に入るであろうこの状況を見過ごしたとなると……

ところが、そういった深謀遠慮を見事に打ち砕く声が、腕の中から無邪気に響いた。

「こんばんは。そこで何をしていたらっしゃるの？」
「……う」

ユアン「カイは、たちまち硬直した。驚いたように振り向いた女官に向かって、慌ててかぶりを振る。

「い、いや、わ——余は、その……『そんなつもり』は全くなかったのだ。ただ、姫に何か絵草子でも読んでやろうかと思って、それを選びに立ち寄っただけのこと……」

あ……えーと、その……何やら取り込んでいる様子でもあるし……
そうだ、仔細はまたあとで聞くゆえ、とりあえず、この場は二人でよく話し——」

「やあだ」

プツ、と女官がふき出した。

「なあにビビりまくってんのさ、あんた」

ユアン「カイは相手を凝視した。この声、この言葉づかい……」

「……いや、しかし……驚いたな」

ややあつて、ようやく彼は言葉を継いだ。

「見違えた。その、何というか……良家の令嬢と言っても通ると思うぞ。口さえ開かねば、だが」

「……一言多いよ」

深々とクウは嘆息した。

「とはいえ、兄ちゃんよりはマシか——ちょっと聞いたかい？ テイエン。女ってのはね、こうして寝るもんなんだよ。まあ、最後の方はともかくとして……って、ティエン？ ねえティエンってば！ ああもお……さっきから、ずうつとこの調子なんだよ。あたし、こいつに連れられてここまで来たから、帰りも一緒じゃないとお城から出られないのに……カイからも何とか言っとくれよ」

「その必要はねえよ」

ぼそり、と、ようやくティエンが口を開いた。

「大丈夫だよ、ちゃんと送ってってやる。ただ、俺は愚問には答えねえ主義でな」

「何だいそりゃ」

たちまちクウはむくれたが、ユアン＝カイは、別の意味ではつとした。ティエンの視線が、突き刺さるようにこちらに向けられている——正確には、ユイファに。

（ひょっとして、警戒しているのか……？）

彼女に正体を知られていることを知らないティエンにとっては、ユイファは明らかに部外者だ。だから……物憂げな顔をしていたのも、ユイファを連れた自分が近づいてくる気配に気づいていたからなのかもしれない。

ユイファの方でも何か感ずるところがあつたのだらう、きゅつとユアン＝カイの襟元をつかんで来る。そんな彼女の頭を安心させるように優しく撫でてやると、ユアン＝カイはとりなした。

「ユイファのことなら心配は要らない。これは、もともとおまえの

ことを知っているのだ——いや、私が教えたというわけではないぞ。目に障りがあるせいで、それを補う感覚が発達したようで、見えざるものも感じ取れるらしいのだ。実際、おまえがここにいるということも、これに教えてもらったぐらいだ。

そうだ、おまえのことを褒めていたぞ。そうだったな？ ユイファ」

こくつとユイファはうなずいた。そして、消え入りそうな声で言った。

「わたくしとは、お友達になつてはくれませんか？ 竜の君様……」

「ねえ、いい加減にその仏頂面だけでもやめてやんなよ」

先回りするようにクウが言った。

「だいたい、カイの妹だつてことは、あんたにとつても妹も同然だろ？ 素直にかわいがってやったらどうなんだい」

「あ、いや……」

やや困惑した面持ちで、ユアン「カイが口をはさんだ。

「ユイファは妹ではないのだ。その——」

「わたくし、陛下のお嫁様になりますのよ」

につこりと笑って、ユイファがあとを引き取った。

「へえ、お嫁様……」

ふんふんとクウはうなずいた。その声が、次の瞬間派手に裏返った。

「……お嫁様あつ？」

期待していた「竜の君」との対面があまり首尾良く行かず、ユイファ姫は少々がっかりしたのかもしれない。

「陛下、ご本のところに連れて行って下さいな」

その後すぐに彼女はそうせがみ、ユアン＝カイは「やれやれ」といった顔をしてそんな彼女を揺すり上げ、場を外した。

「ま、そう凹みなさんな」

いきなり普段通りの口調に戻って、ティエンがにんまりした。

「べっ……別に凹んでなんかないよっ！」

クウの頬が紅潮した。

「ああいうご身分の方のところには、たいてい親が決めた許婚^{いいなすけ}がいるってのは、芝居でも定番の筋書きじゃないか。そんなことくらいでいちいち」

「はいはい、そういうことにしようか」

遮って、くつくくくつ、とティエンは笑った。

「じゃ、ご希望通り、そろそろ送ってやってやるよ。ほんとに日も暮れちまったしな。

ああ、ついでにご希望の服も買ってやる。もう会うこともねえだろっからさ」

「え……？」

怪訝に、クウは目をぱちくりさせた。

「だけど……いや、別にあたしはどつちでもいいんだけどもさ、まだ探してない本棚が結構残ってるんだろ？　それは——」

「いいよ」

「え？」

「たぶん、もう必要ねえ」

ユアンⅡカイたちが去って行った方向を見やって、ティエンは肩をすくめた。

「俺が、ちつとばかり先走りすぎてたんだよ。考えてみたら、あいつも、もう十やそこのガキじゃねえんだもん。自分の心の傷ぐらい、自分で何とかできるんだ。」

あいつな、今まで、ああやってあのお姫さんを連れて歩いたことなんかなかったんだぜ。それどころか、お姫さんには悪いが『何で自分があんなガキを押しつけられなきゃなんねえんだ』って感じありありで、とりあえず一日一回は『お部屋訪問』みてえなことをしなきゃならねえんだけど、それも、あからさまに嫌々ながらでな。

それが、今日になったらあの通りだ——何があつたのかは知らねえが、ともかく、あいつは胆はつを決めたんだよ。あのお姫さんと添って行こうって胆をさ。

それはつまり、お姫さんと本気で『家族』になろうって——自分の手で、自分の『新しい家族』を作ろうって決めたってことなんだ。俺がわざわざ余計なお節介焼いてやらなくなつて、そうやってあいつは、ちゃあんと自分で考えて、自分で決めて、先へ先へ歩いて行けるようになってんだ。

そんなことにも気づかなかつたなんて……俺もヤキが回つたもん

だよな」

ぽんっ、と竜体に変ずると、ティエンは、ぱたぱた、と宙を羽ばたいて、くるくる、と窓枠にとぐろを巻いた。きゅるん……と一声鳴いて、すっかり暮れ切った夜空を見上げる。

その背中を、クウは少しの間見つめた。見つめながら、ユアン「カイが姫と共に現れてからのことを思い返してみる。そして、くすりと笑った——ティエンが仏頂面で姫を見ていた、もうひとつの理由に気づいたから。

「なあにカツコつけてんだよ」

相手と並んで窓辺にもたれると、その額を彼女はピンと弾いた。

「もつと素直に言ったらどうなんだい——俺は妬いてるんだって」

ティエンは真つ赤な目を剥いた。きゅきゅきゅきゅつ、と不本意げに抗議の声を上げる。「何馬鹿なこと言つてやがる！」という「信号」がクウにだけはちゃんと伝わったのだが、彼女はそれをあつさり無視した。

「だってそうだろ？」

あんたたちにとつちや、誰よりもお互いが一番だった。昨夜みたく、あつさり自分の命投げうつちまうくらいにさ。

なのに、いきなりそこにあのお姫さんが割り込んできた——いや、もしかしたらあたしだってそうだったのかもしれないけど、あたしは何だかんだ言つたつて身分違い、こつやつて呼び出されでもしない限りは、それこそ会うことだつてないだろ。でも、お姫さんとなると、そうは行かない。

だから、あんたは穏やかじゃいらなかったんだ。あんなぶすつとした顔してたのだって、ほんととはこらえてたからなんじゃないのかい？ 『勝手に抱きついてんじゃねえ。そこはもともと俺の場所だ！』つて言いたいのをさ。んでもつて、二人がいなくなつちまったら、とうとうこらえきれなくなつちまったんだ。今、急に竜になったのだって、それでなんだろ？ あんたもともと目が赤いから、多少涙目になつたつてわかんないもんねえ……？」

ぴく、と竜の尻尾が動いた。が、彼は、きゅつ、と一声だけ鳴いてそつぽを向いた——あくまでも認めないつもりらしい。

（やれやれ、しょうがない頑固もんだこと……）

クウが呆れて心でひとりごちたとき、その姿が突然消えた。

「ティエン……？」

驚いて呼びかけたのとほとんど同時に、背後から別の声が響いた。

「だめ、行かないで……！」

虚空に片手をのべると、ユイファ姫はゆっくりとこちらへ歩いてきた。その足取りは、まるで歩き始めた赤子の如くふらふらとおぼつかなかったが、視線と手の差し伸べられた方向は、ぴたりと一点に定まっていた。そこにティエンがいる、ということなのだろう。

「あなたが行ってしまったら、陛下は泣いてしまうわ。

さつきだって、そうだったもの。あなたのことを捜しながら、あなたに何かあったのだとしたらどうしよう、もう二度と会えなくなったらどうしようって、お心の中で泣いていらしたもの……！」

陛下をまたそんなふうにお泣かせするくらいだったら、ユイファは陛下のお嫁様にならなくても構わない。もしあなたが、ユイファがここにいるのが嫌だと言うのなら、実家へ戻ってもいい……！」

だって陛下は、ユイファの目を見ても何もおっしゃらなかったし、お話も、ひとつも疑わずに聞いて下さったんですもの。父上だって、母上だって、隠しなさい、決して知られてはなりませんって、そればかりしかおっしゃらなかったのに……だから、ユイファはそのご恩返しをしたいの。

ユイファのことだったら、大丈夫よ。これまでだってずっと、お部屋にくまちゃんと二人つきりでいたのですもの。これからだって、これから、だっ……って……」

もう片方の手に抱えていた「無二の友」をぎゅっと抱きしめると、姫は目をぱちぱちさせた。気を取り直そうとするかのようにまた一

歩踏み出そうとして、つるりと足を滑らせる。あわや転倒か、と思われたそのとき、その体が空中で斜めになって止まった。

きゅう、と怒ったような一鳴きが聞こえ、ティエンが姿を現した。それで、姫自身にも、これを見ていたクウにもからくりが知れた――長い尻尾がぐるぐると姫の腰に巻きつき、倒れないよう支えていたのだ。

キーキーと唸りながら相手を引き起こすと、彼は尻尾を解き、人の姿に戻った。

「……たくカイの奴、嫁のことほっぽり出してどこほつついてやるんだ」

相変わらずそっぽを向いたまま、ぶっきらぼうに呟く。

「しょうがねえなあ……やっぱ俺がいねえと駄目なんじゃねえか」
「……よく言っわ」

クウが、ぶつっとふき出した。

ユイファ姫の屈託ない歓声がこだましている。

彼女の目の前の空間には一見何もないのだが、そこに時折ひよいと手を伸ばしては、きやつきやつと笑う。実家での教育が行き届いていたからか、はたまた背負ったものの重さのせいかな、年齢の割にませた口をきいている彼女だったが、こうしているさまを見るとやはりまだまだ幼いのだなと、あらためてクウは思う。

にしても、いったい何をしているのだろうか？ 遠慮がちにそのことを尋ねてみると、姫はにっこりして答えた。

「『尻尾取り遊び』ですわ！」

つまり、そこには竜体となったティエンがおり、はたはたと動くその尻尾をユイファはとらえようしているのだった。例によって、ティエンは「ほかの人間対策」として姿を消しているのだが、「心眼」が使えるユイファにとっては何の問題もない。

「つかまえた！」

「あーあ、つかまっちゃった」

苦笑を含んだ声が虚空から聞こえた。ついで、人に戻ったティエンが現れる。一瞬前まではあった尻尾の感触を確かめるように手のひらを見つめて、ユイファがちよっと不満げな顔になった。

「ええっ、もう終わりなの？」

「終わりなの」

しゃがんでユイファに視線を合わせると、ティエンはきっぱりと

言い切った。

「カイのことも気になるしな。ほんとに何やってんだ、あいつ。いくら何だって、ちょっと放つときすぎだぞ。便所でも行ってるのかな」

「いいえ、そういうことはないと思うわ」

目を瞠って、ユイファはかぶりを振った。

「それに、放っておかれてるわけでもないし。

ユイファ、自分でここに来たのよ。陛下のお邪魔をしてはいけな
いと思って」

「邪魔……？」

「ええ。あのね。さっき絵草子を探していたら、ご本と一緒にお手紙みたいなのが出てきたの。それを見たら、陛下、急に怖いお顔をなさって……それで、きっと子どもが見てはいけないお手紙なのかなって思ったの。だから……」

「ふうん……」

ティエンの眉がひそめられた。

（手紙、か……）

ある予感が、ふと頭をかすめた。もしかして、それこそが自分たちはずっと探していたものだったのではないか……

姫が「怖い」と言ったのは、恐らくその手紙を見たユアン「カイが何らかの動揺を見せ、それを感じ取ったからなのだろう。無論、動揺したからといって、内容が絶対に「それ」だと決めつけられるものではないが、可能性が全くないというわけでもない。

「俺、ちょっと様子見てくる」

こいつのこと頼むな、と、ユイファの両肩をつかんでクウの方へ押しやると、ティエンは足早に絵草子の置かれた書架へ向かった。

問題の書架に着くと、果たしてユアン＝カイの姿があった。ユイファの言っていた通り、白い封筒のようなものを両手に握り、立ち尽くしている。

（やっべ……）

今度は嫌な予感がした。ひよつとすると本当にそれは問題の手紙で、そのうえ最悪の内容だったのではあるまいか。

「……おい」

相手に歩み寄ると、ティエンはそつと声をかけた。

「大丈夫か——」

その言葉が途切れ、息が呑み込まれた。

ユアン＝カイは、手紙を開封してはいなかった。『まだ見ぬ我が子へ』そう書かれた封筒の表を凝視したまま、固まっていたのだ。開けたい。でも、開けるのが怖い——そんな逡巡が、その横顔にはありありと表れていた。

しかも、ティエンに息を吞ませたのはそのことばかりではなかった。彼もまた、別の意味で封筒の文字に目を奪われたのだ。

（これは……）

母上の、筆跡だ……

ようやくティエンの存在に気づいたのか、ユアン〓カイが身じろぎした。まるで十歳の少年に戻ったかのように不安げな瞳をティエンに向けて、彼は震える手で手紙を差し出した。

「先に……読んで、くれないだろうか……」

懇願した声も、小刻みに震えていた。

「もしかしたら……もしかしたら、おまえ宛て、なのかも、しれないし……」

ズキリと胸の奥に痛みを感じて、ティエンは目を伏せた。「まだ見ぬ」と書いてあるぐらいだから、宛て先は絶対にユアン〓カイに違いないのだ。それなのに、そのことが信じられない——それは、ユアン〓カイが、いかに「母にとつての『我が子』はティエンだけなのだ」という呪縛に囚われているかを物語っていた。

ならば、その呪縛を解いてやるのは、確かに自分の役目だろう。心中でうなずくと、ティエンは手紙を受け取った。封を切ろうとする手が一瞬ためらう。だが、彼はすぐにそのためらいを打ち消した。

（大丈夫だ……たぶん）

もし、あのケバいババア——もとい「非常に化粧映えのする大奥様」が、王太后、つまり前王妃であつたとしたなら。

つい先刻、彼女のことを思い出すまで、ティエンが「その可能性」を考えもしなかったのは、あんな場所にそのような立場の人間が来るとは思いもしなかったからだった。

それに、彼女自身、「王太后様」と言われて想像する姿とは全くかけ離れた様子をしていた。

まるで面でもかぶっているかの如く分厚い化粧。

その辺にいる客引き女と見まごうような、豹の柄など描かれた派手な色の衣服。

おまけに酒癖が致命的に悪く、同じ話を朝まで百遍近くもティエンに聞かせた挙句、そのたびに、彼に抱きついては、化粧がすべて崩れ落ちんばかりの勢いで泣きまくってくれたのである。

それゆえに、ティエンとしては、いわば「悪夢をあえて忘却の彼方へ葬り去る」のと同じ感覚で、ちゃっちゃと忘れ去ってしまったのであった。もっとも、仮に覚えていたとしても、彼女が王太后であるという確たる証あかしがない以上、あくまでも「ひとつの可能性」として自分の胸だけに留めておくしかなかったのではあるが……

加えて、話の内容自体も、実は、ティエンがユアン・カイから聞いたそれとは若干食い違っていた。

夫と三人の息子に囲まれて、彼女は平穏で幸せな日々を送っていた。

ところが、あるとき、誠実だとばかり思っていた夫が妾しやうを囲っていることがわかった。

『あれは私の古い友人の奥方だ。わけあって友人と共に暮らせぬようになつたので、義によって面倒を見ておるだけのこと』

夫はそう説明したが、失望と嫉妬で心が一杯だった彼女は一切聞く耳を持たなかった。

しかも、それから三月ほど経つて、妾が懐妊していることがわかった。それ見たことか——失望が「絶望」に変ずるのに、さして時間はいかからなかった。そして、気づくと彼女は「人としての道」を踏み外していた。ありていに言えば、あの手この手を使って、妾をさんざんいびり倒したのである。

それに耐え切れなくなったのだろうか、やがて妾は床に臥せりがちとなった。しかし、それでも彼女の心に安寧は訪れなかった。たとえ妾をどのような状態にしようと、その腹が日に日に大きくなっていくことは止められなかったからだ。その中にいる子がもし男子で、いずれ自分の三人の息子に仇なす存在となったら……！

《そんな子など、無事に産ませてなるものか……！》

その一心で、彼女は、自分の息のかかった僧都そうずに命じてありとあらゆる呪法をかけさせた。

が、その甲斐もなく、月満ちて子は生まれてきてしまった。それも、男子だという。最悪の事態に、彼女は遂に修羅となった。「見舞い」と称して妾の居室を訪れ、部屋に入るやいなや、懷に忍ばせていた短刀を抜き、妾の傍らですやすやと寝ていた赤子を亡き者にしようとしたのである。

幸い警備の者が異状に気づいて止めに入ったので事は未遂に終わったが、ようやく場が落ち着いたら頃、赤子の様子を見にやって来た医師が、床の中で冷たくなっている妾を発見した。死因は、心の臓の発作であった。もともと病で弱っていた心に、我が子が刃物で襲われたという光景はあまりにも刺激と衝撃が強すぎたのだらう。

母親を失った赤子は、その後間もなく遠国へ養子に出された。父親である夫は本心では手元で育てたいと望んでいたようだったが、

経緯が経緯だっただけに、また妻に妙な気を起こされてはという思いもあったのだろう、涙を吞んで息子を送り出した。

これと同時に、屋敷には徹底した「緘口令」が敷かれた。仮にも大家の奥方の身分にある者が危うく人殺しの下手人となるところだった、などということが外部に漏れてはいろいろな意味で面倒になる、というのがその理由であつた。かくて、「妾は気鬱の病をつのらせた末に自害した」ということになり、その子がこれほど早くに養子に出されてしまったのは「家に穢れを留めておくことを避けたため」だということになった。

『もつとも、天罰が下つたのであろうな。夫も、それに三人の息子たちも、戦やら病やらで皆次々と世を去ってしまったのよ。』

そして、今や、養子にやつたはずのあの赤子が我が家の家督を継いでいる。その子はどうかやら何も話を聞かされていなかったようだな、戻ってきて早々、「母上様、お会いしようございました」とそれはそれは屈託なく声をかけてきて……その瞬間ほど、心が痛んだことはなかった。だから、顔も見ずに実家へ逃げてきてしもつた』

ほんに愚か者だと笑ってくれて良いのだぞ。そう話を結ぶと、「大奥様」は、杯を握り締めた手の上に、ぼとぼと大粒の涙をこぼした……

「そう、か……」

ティエンの話を聞き終えると、ユアンⅡカイは小さく唸った。

「確かに、話の中の人物関係から考えても、そのご婦人が義母上であつたという可能性はかなり高そうだが……そして、もしその話がまことだとするなら、私にとってはこれほどの『救い』もないのだが……義母上にはいささか申し訳ないがな」

「だろ？」

文字通り「背中を押す」つもりで、ティエンはバーンと相手の背中を叩いた。それから、首をかしげた。

「なあ、おまえ……背中に、できものか何かある？」

「ああ……瘤こぶのことか」

ようやく少しだけ、ユアンⅡカイは口角を上げた。

「昔からあるのだ。二つ並んでな。それで、よく兄——いや、『下（つ国）の王太子殿』には、ラクダだ何だとからかわれたものだ。……ああ、気にせずとも構わん。小さいものだし、自分の目からは見えんから普段は全く気にならんしな」

まずい、という顔になったティエンを慮るように言葉を付け足す。それから、ひょいと封書を自分の手に取り戻した。

「やはり、これは自分の手で開けよう。」

今の話を聞いて、だいぶ気持ちが楽になった。それに、思えばこの手紙の主はおまえの母親でもあるのだ。万が一良くない内容であつたら、なまじ母上との思い出があれこれとある分、かえってつかろう」

「カイ……」

おまえ、こんなときにまでそんな心配を……ぐつと胸を衝かれて、ティエンは思わず目頭を熱くしかけたが、相手の言葉にはまだ続きがあつた。

「何しろ、天から落ちてきたあるとき、おまえときたら、『ははさま、ははさま』と、夢うつつにそれはそれはやかましかったからな」

妙に意地悪げな顔になって、ユアン「カイはにんまりした。

「よほど大切だったのだろうが、その『ははさま』とやらが……？」
「なっ、バツ……！」

みるみるうちに、ティエンは赤面した。

ユアン「カイに助けられたとき、自分はそんなうわごとを口走っていたのか。だが、ユアン「カイもユアン「カイだ。十年もそのことを黙っていたばかりか、今、この状況でいきなりそれを口走るとは——しかも、まるで自分がいまだ「母離れ」できていないと言わんばかりに。

「おまえなっ……」

抗議の声を上げようとして、しかし、ふと思いとどまる。

ユアン「カイは、母を母と呼んだことすらないのだ。母の胸に抱かれたことも、彼女の作る料理を食べたことも、一緒に喋ったり笑

ったりしたこと。そんな彼にとって、ティエンのしてきた経験は、想像するだに羨ましいものなのだろう。揶揄は、恐らくその気持ちの裏返しなのだ……

「つたく、ごちゃごちゃ抜かしてねえでちゃっちやと読め！」

ぶっきらぼうに、それだけティエンは言った。

「……そうだな」

ユアン「カイも真顔に戻った。恐る恐る、といった手つきで封を切ると、彼はさらにこわごと、三つ折りになった紙を開いた。

まだ みぬ わがこ ゆあんかいへ

かあさんは ほんとうは てがみなんかじゃなく じぶんでは
なした したいです

ずっと もりにすんでいて てならいも したことが ないので
うまく かけるかも わかりません

でも おいしやさまが あなたは しんのぞうが わるくて あま
り ながくは いきられませんか ゆうので もし ゆあんかいが
おおきくならないうちに しんでしまつて なにも はなせない
のは いやなので いまのうちに てがみを かきます

ほかの おうじさまたちは もうおおきいから えぞうしに はさ
んでおけば ゆあんかいだけしか みないと おもつて えぞうし
にはさんでおく に きめました

ゆあんかいは いくつになりましたか
ななつの おいわいが すんだぐらいかな
げんきにしますか

おきさきさまの こどもではないと いじめられてませんか
かあさんは それが いちばん しんぱいしています

でも ないてはいけませんよ
どうしてかとゆうと ゆあんかいには りっぱな おとうさまが
ふたりもいるからです

おそのうえに りゆうのくにがあるのは しつてますか
ゆあんかいの ほんとの おとうさまは いつか そのの おうさ

まになります

そして この こくおうさまは おとうさまの いちばんのおともだちです

かあさんは そらをとべなくて おとうさまに ついてゆけなかったので こくおうさまが おとうさまに かわって かあさんと ゆあんかいを めんどくみてくれることに なったのです

そして ゆあんかいの ゆあんは こくおうさまが くれた なまえです

ゆあんかいの おとうさまの かわりに なりたいので なまえを くれたと こくおうさまは ゆいしました

だから ゆあんかいには ほんとの おとうさまも こくおうさまも どちらも おとうさまです

どちらも つよくて やさしくて りっぱです

だから ゆあんかいも そうゆう ひとに なってほしいです

それから もひとつ しんぱいなのは ゆあんかいが どんなすがたかと ゆうことです

かあさんに にて ひとの かつこだったら いいけど おとうさまに にて つのが あったり はねが あったら いろいろ つらいめに あうかもと しんぱいです

こくおうさまは きつと ゆあんかいを まもってくれるけど それでも つらかったら この てがみを もって おそらをとんで りゅうのくにへ いきなさい

りゅうのくにには おとうさまが いるし ゆあんかいの にいさんの ていえんという こも います

きつと ゆあんかいのことも すぐく かわいがってくれます

ていえんは とても やさしい こなので とても いい きょうだいに なれると おもいます

また しんのぞうが くるしくなったので すこし やすみます
いつも ねているので かあさんは きゆつの やまい になった
と ゆうひとも いますが それは ちがいます

おしろに きたときには おとうさまや ていえんとわかれて さ
みしかつたから びょうきみたいになりました
でも いまは ゆあんかいが おはなしするみたく おなかを ど
んどん けとばすので ちっともさみしくないよ
それで すっかり なおりました

なので もし そのことでも いじめられたら そんなのうそだと
ゆってやりなさい

いま かあさんが たくさん ねているのは おいしやさまが む
りをする と ゆあんかいが げんきに うまれてこられまさんと
ゆうからです

いっぱい やすんで ゆあんかいが げんきに うまれてくるよう
に いっぱい おいのりを しています

かあさんより

ユアンⅡカイは、その文面を何度も何度も読み返した。

それは、彼が自分なりに想像していた以上にたどたく、つたない字とも相俟あいまつて、とても大人が書いたようには見えなかったけれど……それだけに、逆にそこには何の言い訳も作為も感じられなかった。これこそが「求めていた真実」だったのだ——素直に、そう思うことができた。

大きな腹を愛おしげに撫でつつ、「どうにかこの子を周囲の誤解と無理解から救ってやれないものだろうか」と、慣れぬ筆を執り、懸命に頭をひねっている母の姿が、自然と脳裏に浮かび上がっていた。その姿の前では、一切合財が、ほんの些細なことにしか思えなかった——実は自分は前国王の実子ではなく、それどころか、ティエンと同様に、竜の……しかも、かの竜神王の血を引いていたのだ、ということさえも。

「私は、決して『望まれない子』などではなかったのだな……」

じわり、とまぶたが熱くなり、胸の奥から嗚咽がこみ上げる。目を閉じてそれを必死に呑み下そうとしているユアンⅡカイを、そつとティエンが抱き寄せた。

「バカだな、おまえ。」

確かに手紙には『泣いてはいけません』って書いてあるけど、そりゃ『いじめられたとき』のことだろ？ 今は『嬉しいとき』なんだから、思いつきり泣いていいんだぜ？」

まるでその一言を待っていたかのように、ユアンⅡカイの瞳がう

るつると潤んだ。相手の両袖をぎゅっと握り締めると、彼は激しく肩を震わせた。

その不器用な慟哭を聞きつけたのだろうか、足音が近づいてきて、ユイファ姫を抱いたクウが顔を覗かせた。

「どうし——」

途中で言葉が呑み込まれ、とまどったような視線が、号泣している本人と彼にすりつかれているティエンの両方を見比べる。「し——」と手振りだけで伝えようと、ティエンはその手で弟の頭をさらに胸元近くへ引き寄せた。くせのかかった黒い髪の毛を、いささか荒っぽい手つきでくしゃくしゃと撫でてやる——その目が、次の瞬間、怪訝にしばたかかれた。手のひらに、何か引つかかりを感じる

……

……と、思う間もなく。

ぼんつ、という小気味の良い音と共に、国王の姿が霧散した。あつけに取られた一同の前に、真っ黒な何かが現れる——手のひらに乗る大きさのチビ竜であった。ちょうど、ユアン＝カイと初めて出会った頃のティエンを思わせるような……

漆黒の瞳を見開いて、チビ黒竜はきよきよと辺りを見回した。まず自分の姿に驚愕し、ついで、自分の足元に地面がないことに気づいて、泡を食ったようにキーキーと鳴き喚き、短い手足をじたばたさせる。

「……おっと！」

危うく急降下しそうになったチビ黒竜を、ティエンが急いで受け止めた。困った顔で手のひらにちよこんと乗っかっている相手をあらためてじいっと観察し、ややあつて、不意に得心する。

「なるほどなあ……そう言や、おまえつて、こうやって遠慮なく頭触られたこと、なかったかもな」

王族の体、特に頭にみだりに触れることは、大いなる禁忌事項のひとつ。無論、ユアン〃カイにとって「目上」にあたる前国王や王太后、彼の兄たちは例外だが、ユアン〃カイの場合は彼らに会ったことさえなかった。

ティエンにしても、記憶を失い、自分が何ものなのかもわからなかったということもあり、普段はもっぱら白竜の姿でいたから、親愛の情の表し方は、頬を舐めるか手や腕を甘噛みするかといった感じで……これでは、変化^{へんげ}する機会もなかったわけである。

それに、あの「大奥様」が本当に王太后で、その話も真実であったなら、ユアン〃カイは、母の胎内にいたときに「ありとあらゆる呪法」をかけられていたのだ。その中には、もしかしたら「魔封じ」のようなものもあり、それが期せずして彼の「竜人化」を阻んでい

たのかもしれない。だから、本来はティエンのようにあとからであつても生えてくるはずだった角も翼も、体内に留まったままになつていたのだろつ。

（そついえば、さつきの背中「瘤」……）

「二つ並んでいる」とユアン「カイは言っていた。ということは、恐らくはあれが、「翼になるはずだったモノ」……」

チビ黒竜の方には、小さいながらも灰色の二本角と真っ黒い一對の翼がちゃんと備わっていた。ただ、翼の方は、一度も使ったことがなかったせいか、くしゃくしゃになつて丸まっている。

「ありやりや、これじゃ飛べねえよな」

そつ言つて、ティエンは指で注意深く翼を広げ、しわを伸ばしてやった。多少照れくささもあつたのか、チビ黒竜は最初はきゅーきゅー文句を言っていたが、ややあつて、その目がとろんとし、程なく気持ちよさげにゆっくり閉じた。

「……へえええ」

ようやく驚きから醒めたクウとユイファが、興味津々に覗き込む。

「こつ言つちやナンだけど……かわいいもんだねえ」

「ユイファ、お手々にのせてみたい……！」

「おいおい、みせもん見世物じゃねえぞ」

苦笑して、ティエンは、ちょいちょい、とチビ黒竜の体を指でつついた。

「起きろよ。このまんまじゃおまえ、女どもの格好の玩具になっちゃうぞ」

きゅっ、と小さく声を発して、チビ黒竜は目を覚ました。ティエンの言葉通り、キラキラ輝く瞳が二対、今にも取って食いそうな勢いで自分を凝視しているのに気づくと、きゅーっ、と怯えた声を上げてふるふると身を震わせる。それから、ようやく使えるようになった翼でぱたとティエンの肩まで飛んで行き、その耳元に何事か囁いた。とたん、ティエンの顔色が変わった。

「『戻り』方がわからない、だって……？」

きゅーん、と哀しげに黒竜はうなだれた。

ひつぎ
一月ぶりに現れた青年を見て、団子屋は苦笑した。

「兄ちゃん、今日はちゃあんと小銭を持ってきたんだろうな？」
「無論だ」

苦笑を返すと、青年——ユアン・カイは、巾着から銅貨を1つ出して団子屋に渡した。引き換えに差し出された餡団子の串を受け取りつつ、

「ところで店主。実は人と待ち合わせているのだが、この場で団子を食べながら待つていても差し支えないだろうか」

「ああ？ もちろんそれは構わねえけど——ああ、団子の前にだけは立たねえでくれよ。そのでけえ図体がでーんと立ちはだかつてちや、ほかの客が買えねえだろ？」

「承知した。なるほど、確かにそれは理になっっているな」

まるで新しい発見をした幼子のように目を輝かせてうなずくと、ユアン・カイは素直に屋台の前を離れ、団子屋と並ぶ格好で道の端へ立った。ふう、ふうと何度も団子に息を吹きかけ、やけに慎重に口へ運ぶ。

「……………熱っ！」
あつ

端正な顔が、一瞬だけしかめられた。が、すぐにうつとりとろけた表情へと変わり、

「ああ……………やはり絶品だ」

「そうかい？」

そう言われれば、決して悪い気はしない。照れくさげにひよいと肩をすくめると、団子屋はあらためて相手を見直した。

「それはそうと兄ちゃん、旅にでも出るのかい」

上下衣は先日と変わらないが、その背中に菅笠すががさと風呂敷包みの荷物がかくりつけられているのに目が留まったのである。

すると、団子をこくりと飲み込んで、ユアン「カイはにっこりうなずいた。

「隣りの宿場まで、人を送って行く必要ができてな」

「……オレは全然頼んだ覚えはねえけど？」

むすつとした声が、横合いから割って入った。少年の姿をしたクウであった。やはり、旅に出るいでたちをしている。

「なあ兄ちゃん。悪いことは言わねえ、やっぱりお屋敷に帰った方がいいんじゃないのかい。あんたがいなくちゃ、ティエンだっているらと大変だろうし——」

「あれには一年ほど『大変な思い』をさせておいたっていいぐらいだ！」

クウに負けず劣らずむすつとした顔になって、ユアン「カイはそっぽを向いた。

「おまえは途中で帰ったから知らんだろうが、あのあと、『元に戻る技』を会得するのに朝までかかったのだぞ。

おまけに、あれ以来、ユイファの奴には隙あらば頭を触ろうとさ

れるし……何がおかしい！ 笑いごとではないぞ！」
「だって……」

言っただけ、クウはさらに笑い崩れた。あのお姫様の無邪気な「猛攻」を受けて、情けなくも逃げ惑っている国王陛下の姿が、まざまざと頭に浮かんで離れない……

そんな彼女を、なおもむっとした顔でユアン「カイは眺めていたが、ややあって、ふとその表情を和らげた。

（しかし……まあ、良かった）

理由は何であるにせよ、「笑ってくれている」のだものな……

クウは、好き好んで旅に出ようとしているわけではなかった。

事の起こりは今から半月ほど前、ユアン・カイに貰った金子きんすでいよいよあの土地を買おうという算段を始めたときにさかのぼる。

彼女が卓の上に並べた大金を目の当たりにして、地主は不承不承土地を譲り渡すことに同意したのだが……その翌日、相変わらず宿屋に滞在していた（新居を建てるのは土地を買ってからだと決めていたから）クウのもとへ、例の私服警察部隊六人衆が踏み込んできて、いきなり彼女を捕縛した。

『地主から話は聞いた。おまえみてえな境遇のもんが、急にそんな大金を手に入れられるわけがねえ。大方、どこぞから盗んで来たんだろうが！』

何だかんだ言っても土地を手放しなくなかった地主は、警察部隊にこの件を密告していたのである。捕り方が口にした疑念は、また地主が感じたそれでもあったのだろう。もちろん、「これはある人からの謝罪と謝礼の金で、決して後ろ暗いものではない」と何度もクウは主張したのだが、これまでの行いのこともあって、聞き届けではもらえなかった。結果、彼女は投獄され、沙汰を待つことになった。

牢の中で、クウは自分の軽率さを悔やんだ。

他人がある日突然大金を手にして現れたら、自分だって思わず「あんた、それどっかから盗んできたのかい？」と尋ねるだろう。それなのに、いざ自分がその立場になってみたら、そんな疑いを持たれることなど夢にも思いつかなかった。結局、慣れない大金を手

して、自分は舞い上がっていたのだ。

《ごめん、カイ》

せつかくのあなたの心づくしの金だったのに、最悪の形で無駄にしちまったよ……

ところが、牢に入って三日目の夜遅く、思いがけない来訪者があった。その小ささを生かして窓の鉄格子を難なく潜り抜けると、チビ黒竜はクウの左の肩口にちょこんと止まった。

『……すまない。私が与えた金子きんすのせいで、かえってとんでもない目に遭わせてしまった』

長い長い時間をかけて「彼」はようやくそう口にし、きゆる……と哀しげにうつむいた。そして、さらにさらに長い沈黙のあと、

『警察長官と話してきた。今回の件についても、よくよく説明した。だから、とりあえず極刑は免れると思う。』

ただ……これまで重ねてきた余罪の方は、いかんともしがたいそうだ。こちらについても、おまえの境遇を鑑かんみて、情状酌量の余地は十分にあると説得してはみたのだが……少なくとも、城下からの追放刑にはなってしまうらしい。本当に、力及ばず——』

くるん、と、とぐろを巻くように丸まると、チビ黒竜はその頭をとぐろの中に突っ込んだ。たちまち、全身が小刻みに震え出す。

『……ほんとに泣き虫なんだから』

苦笑して、クウはそっと相手の体をつかみ、手のひらの上に載せ

てやった。ぼわぼわした黒い鬣たてがみをそつと撫でてやりながら、

『あんたのせいじゃないよ。あんたは、あたしに良かれと思ってあの金をくれた——あたしが、もつと賢くそれを使えば良かっただけのことだったんだから。』

それにさ、こないだあいつらに追つかけられたとき、もしあんたが助けてくれなかったら、どのみちここに入つて、今頃下手したら打ち首か、良くて島流しぐらいにはなつてたかもしれないんだ。それを思つたら、この街を出て行くだけで済むなんて……逆に礼を言いたいぐらいだよ。ほんとだよ?。』

きゆるつ、と一鳴きして、チビ黒竜は顔を上げた。クウが思つた通り涙でベタベタになつた頬を短い両手でくしくしと拭くと、彼は手のひらから落ちんばかりに身を乗り出した。

『ならば、出立が決まったら教えてくれ。途中まで——そうだな、隣りの宿場ぐらいまでは送つて行く。せめてそのぐらいは、させてもらわねば気が済まん!』

(……にしても)

城下を出て次の宿場町に向かう街道を歩きながら、クウはいささか呆れて同行者を眺めやった。

ユアン「カイの手には、さらに買い足した団子の串が二本も握られていた。その足取りは今にも弾み出しそうなくらい軽やかで、視線も一所に定まってなどいない。」

「すごいものだ……城下を一步出ただけで、こんなにも雄大な自然が広がっているとは！ 見てみる、あの山の稜線など、芸術品の如き美しさだ！」

「おお、こんなところに花が咲いている！ これはいったい何と言う名なのだろう？」

「今駆けて行ったのが飛脚という者か。聞きしに勝る足の速さだな！」

「あそこに見えるのは、もしかして茶店とかいうものか？ もしや、あの店にも団子が置いてあるだろうか？」

「……もしや、自分を送って行くというのは口実で、本当は彼自身が「外の世界」に出たかっただけなのではないだろうか？ この前、団子を買いに城下へ出てきたときと同じように……」

「……あのさ、カイ」

何となく気になって、クウは確かめた。

「あんた、ちゃんとティエンに断ってから来たの？」

「……」

「黙って出てきたのかい！」

クウは、ため息をついて天を仰いだ。だとしたら、今頃王宮は――というよりティエンが、青ざめて右往左往していることだろう。

（ほんとは、あたしが引つ張ってでも戻った方がいいんだろうけどねえ……）

いかんせん、自分は「追放」となった身であるから、おいそれと戻るわけにも行かない。

「あのさ、オレはもういいから、やっぱ、あんたはここから帰った方が」

「嫌だ」

あまりにも予想通りの答えが返ってきて、クウはすっかり頭を抱えた。

「嫌だつてあんた、ガキじゃないんだから……それに、王様が不在だなんて」

「どうせ王家の血統でないのならば、ティエンが執務しても同じことだ」

しれっとして、国王はとんでもないことを言い放った。

「それどころか、下手をしたらあいつに任せておいた方がよほど何もかもうまく運ぶかもしれん。

いつかも話しただろう。あいつは何もかも私より『上』なのだ。仕事は速いし、交渉事や戦の才も抜群だし……それに引き換え、私

など、奴ならほんの一刻でできる決裁事項の処理にも午前中一杯かかる始末だし、世慣れていないせいもあって、人との接し方にも正直今ひとつ自信がない。まあ、腕の方にはそれなりに覚えがあるが、何分今は平時だしな。

だから、せめて『世慣れていない』一点だけでも改善したいのだ。それに、実際にこの目で国の内情を見ることができれば、決裁の可否の判断をする際にも何かと役に立つのではないかと思う」

「……ふうん」

相変わらず、言っていることは半分もわからない。だが、単なるわがままというのではなく、ユアン＝カイなりに考えあつてのことなのだということはクウにも理解できた。

それに、彼が言うようにティエンが「才ある者」なのならば、闇雲に「任されて」ばかりはいないだろう。もしどうしてもユアン＝カイ本人の出番が必要だ、ということになれば何をおいてもすつ飛んできて、頭を一発引っぱたいてチビ黒竜にしても連れて帰るに違いない。

「まあ……じゃあ、ほんとに次の宿場に着くまでだよ」

「わかつている」

大きくうなずくと、ユアン＝カイは心底嬉しげに破顔した。思わずクウは目をそらした。顔に、かあつと血が上つてくるのが自分でもはつきりとわかる——まったくこの男ときたら、この手の笑顔にどれほどの「威力」があるのか知っていてやっているのだろうか？ しかも、次の瞬間、いきなり手まで取られた。ますますクウは真っ赤になった。

「な、何……」

「ちよつと持っていてくれ」

「……は？」

意味を取りかねてぽかんとしている間に、団子の串をしっかりと握らされる。と思う間もなく、ぽんっという音と共に、国王の姿は霧散した。

ぱたたた……と羽ばたきながら、チビ黒竜は、妙にせわしなく、くるくるとあたりを飛び回った。それから、何かを思いついたようにきゅっとなを上げると、一直線に飛び込んだ——クウの上衣の胸元に。

「なっ？ えっ……？ ええっ……？？」

いろいろな意味で衝撃を受けて、クウは二の句が継げない——まったくこの男ときたら、自分が何をやらかしたのかちゃんと意識しているのだろうか？

その不可解な行動の理由は、しかし間もなく判明した。

しゅっ、と空を切る音がした、かと思うと、目の前に黒髪黒眼の
ティエンが現れた。

「カツ……カイはどこだ……？」

はあはあと荒い息をしながら、クウに詰め寄る。

「奴も一緒なんだろ？ 隠したって無駄だからな！ その手に持つ
てる団子の串が、何よりのあか……し……だ………うおおあつっ！」

頓狂な声を上げて、ティエンは硬直した。クウが身につけている
上衣は身ごろを重ねて帯で留める形になっているのだが、この帯の
少し上——心の臓あたりに、ぽこつとひとつ、明らかに不自然なふ
くらみができている。

「どっ、どこに隠れてんだよてめえ！」

「ふん、引きずり出せるものなら引きずり出してみろ！」

ティエンとクウ以外には「きゆるっ、きゆるるるるるっ！」と
しか聞こえない声で、勝ち誇ったようにチビ黒竜は叫んだ。

「貴様に『その勇気』があればの話だがな！」

「てっ……てめえ汚ねえぞ！」

チビ黒竜をつまみ出すこと自体はわけもない。だが、それをする
ためには、クウの襟元から手突っ込まねばならないのだ。ではク

ウ本人に頼めば済むかと言えば、そうも行かない。何しろここは天下の公道だ。そんな場所で、いくら男装しているとはいえ女性には違いない彼女に対して、胸元に手を入れるも同然の振る舞いをしろとは、男のティエンの口からはとても……

「とつ、とにかくそつから出て来い！ いきなり捕まえたりなんかしねえからっ」

「そう言う奴に限って、こちらが出て来たたとんに捕まえにかかるものだ！」

頑迷にチビ黒竜は言い張った。

「私は戻らないからな。クウを無事隣りの宿場に送り届けるまでは……！」

それに、城下以外の街の様子も一度は見てみたいのだ。視察に行けば済むと言われればその通りだが、大臣たちが用意した計画に従って見えては見えぬものもたくさんある。現に、何度も視察しているはずの城下でさえ、非公式に出かけたあの晩には全く違った様子に見えたのだ。

だから……本当は、全国津々浦々をくまなく回ってみたいと思っているぐらいだ。『隣りの街だけ』というのは、これでもかなりの譲歩なのだぞ！

頼むティエン。今はこのまま……戻ったら、この埋め合わせはきちんとするから。もう二度と、『城下に団子を食いにいきたい』などと言ったりしないから……！」

がしゃがしゃ、とティエンは後頭部を掻いた。うつつ……としばし唸ったのち、おもむろに彼は言った。

「半年だ」

きゅっ、という声と共に、黒竜がぴよこんと顔を出した。黒い瞳をまん丸に睜って、信じがたい、と言いたげに相手を見つめる。

「半年過ぎても戻って来なかったら、マジで王位、篡奪^{さんだつ}しちまうぞ」

わざとらしく酷薄に笑って、ティエンは肩をすくめた。

「何しろ、おまえと俺は同父同母の兄弟なんだ。おまえがこの国の玉座に座れるんだったら、俺が座ったっておかしくはねえだろう。ま、せいぜいそうならねえように、全国津々浦々で『修行』積んで帰って来い！」

それから、クウに向かって片目をつぶり、小声で付け加えた。

「悪いけど『目付役』頼むわ。この非常識っぷりじゃ、いつどこで誰にどんな迷惑かけるかわかったもんじゃねえからな」

確かに、既に「非常識」の連続だ。苦笑いして、クウは承知した。

5（最終話）

「何かあったときの連絡用に」とクウの手に小粒の「竜の水晶玉」を握らせ、来たときと同じように、しゅっと一陣の風を残して、テイエンは王都へと戻って行った。

「良かったじゃないか、兄ちゃんのお許しが出てさ」

ちよいちよい、と上衣の上からチビ黒竜をつついて、クウは声をかけた。

「もう出といでよ。いつまでもそんなところにいたら窮屈だろ——」

その言葉が途切れ、彼女は小さくふき出した。

「やれやれ。はしやぎすぎて疲れちまったのかねえ」

身ごろと胸の間にわずかにできた隙間から、チビ黒竜の体の一部が見えていた。くるんと丸まった背中では規則正しく上下し、すうすうと気持ちよさげな呼吸音が聞こえてくる。飛び込んできたときより若干ずっしりとした重みが、彼がいかに安心して寝入っているかを物語っていた。

「なあ、オレを『送り届ける』んじゃないのかい？ 団子だつて、このまんまじゃ固くなっちまうよ？」

そう言つて、上衣の上から今度はいささか強めに揺すつてみたが、まるで起きる気配がない。

「あーあ、『目付役』っていうより『守り役』だねこりゃあ」

思わず慨嘆してから、我ながらその名付けがあまりにも的を得ているのに気づいて失笑する。

すぐ泣くし、すぐ寝るし、起きていたら起きていたで何をしでかすかわからない。そんな彼と行動を共にするのは、まさに赤子の子守りをするようなものではないか。否、図体がかく弁も立つ分、赤子よりはるかに厄介かもしれない。

「ほんと、こんなことで、ちゃあんと『立派な王様』になれるのかねえ、このひとは……」

だが、言葉とは裏腹に、そのまなざしは柔らかかった。きゅ、と一瞬だけ胸元を掻き抱くと、クウは再び歩きだした。

笠越しに振り仰いだ空は、ほんのりと色づき始めていた。明日も今日と同様に、穏やかな好天となるのだろう。

この旅も、ずっとそうでありますように……宿に向かって歩を進めつつ、こっそりとクウはそう念じた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5247m/>

白竜奇譚・私を団子屋へ連れてって！

2011年11月11日22時15分発行